

下 成 田

—山梨県御坂町下成田遺跡の調査報告書—

1974

山梨県教育委員会

山梨県遺跡調査団

下 成 田

—山梨県御坂町下成田遺跡の調査報告書—

1974

山梨県教育委員会

山梨県遺跡調査団

序

本県には古代遺跡が数多く分布している。県教育委員会は、建設省から東八代郡御坂町下成田を通過する予定の勝沼バイパス用地内にある埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を委託された。

金川扇状地先端にある本遺跡は、奈良時代～平安時代を中心とする湧水をめぐる特殊遺構と住居址からなる。

本遺跡の発掘調査と報告書刊行に当って、山梨県遺跡調査団長 井出佐重氏をはじめとする調査団員、山梨大学考古学研究会、県立甲府南高校郷土研究部、同山梨高校郷土研究部や、又調査のお世話をしてくださった東八代教育事務所、御坂町教育委員会、地元の方々、ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表する。

昭和49年3月 日

山梨県教育委員会

教育長 清水 林 邑

例 言

- 1 本書は、山梨県東八代郡御坂町下成田地区の勝沼バイパス建設用地上から発見された遺跡の調査報告である。
- 1 調査は、昭和47年3月16日から同年10月12日までの期間、数回に分けて行った。水田地帯のため、関係者に多大なるご迷惑をおかけした。ここに改めて深くおわび申し上げる次第である。
- 1 本発掘調査は山梨県教育委員会から依頼された遺跡調査団が調査にあたったものである。関係代表者は次のとおりである。

山梨県遺跡調査団長 井出 佐 重
同 常任幹事 野 沢 昌 康（発掘担当者）
同 事務局長 鈴 木 孝 三

- 1 本書の編集は、遺跡調査団幹事 折井忠義、萩原三雄が担当した。
- 1 本書の執筆には、調査員の早川方明、渡辺礼一、上原 稔、萩原三雄、県文化財主事、森和敏がそれぞれ分担した。
第1章、第4章、第5章、第6章、第7章を萩原三雄が、第2章Ⅰは早川方明、Ⅱは上原稔、第3章は渡辺礼一、森 和敏がそれぞれ執筆した。
なお報文中、第5章Ⅱ、第6章Ⅱは、調査員討議の上、萩原三雄がまとめた。
図版の作成には、法政大学 曾根博明、早稲田大学 野元晴範、山田武美、沼本芳喜、斉藤裕嗣及び山梨大学考古学研究会の諸君の協力を得た。
- 1 写真の撮影には、森 和敏、安部真一が担当した。



遺跡全景（上住居址，下湧水をめぐる特殊遺構）

目 次

序	
例 言	
第 1 章	序 論……………萩原三雄… 1
第 2 章	遺 跡 の 立 地…………… 3
I	位 置 と 環 境……………早川方明… 3
II	礫 の 起 源……………上原 稔… 6
第 3 章	調 査 の 経 過……………渡辺礼一, 森 和敏…10
第 4 章	A—3 トレンチ出土遺物・須恵器……………萩原三雄…15
第 5 章	住 居 址……………萩原三雄…16
I	遺 構……………16
II	遺 物……………18
第 6 章	湧水をめぐる特殊遺構……………萩原三雄…22
I	遺 構……………22
II	遺 物……………32
第 7 章	考 察……………萩原三雄…37
I	住 居 址……………37
II	湧水をめぐる特殊遺構……………38
	あ と が き……………41

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡付近地形図	4
第 2 図	遺 跡 地 形 図	5
第 3 図	A区及びD区礫の顕微鏡写真（直交ニコル）	7
第 4 図	湧水をめぐる特殊遺構トレンチ設定状況	10
第 5 図	D区礫面出土状況	11
第 6 図	発掘状況及びD区礫面出土状況	13
第 7 図	A-1 トレンチ北壁及び西壁セクション図	14
第 8 図	A-2 トレンチ北壁セクション図	14
第 9 図	A-3 トレンチ須恵器出土状況	15
第10図	須 恵 器 実 測 図	15
第11図	住 居 址 実 測 図	16
第12図	住居址カマド付近微細図	17
第13図	住居址出土遺物実測図（1）	19
第14図	住居址出土遺物実測図（2）	20
第15図	湧水をめぐる特殊遺構	22
第16図	湧水をめぐる特殊遺構エレベーション図	23
第17図	湧水をめぐる特殊遺構実測図	25
第18図	石列セクション図	27
第19図	Aブロック微細図	27
第20図	Bブロック微細図	28
第21図	Dブロック微細図	29
第22図	D区東西トレンチ北壁セクション図	30
第23図	D区南北トレンチ東壁セクション図	31
第24図	出土遺物実測図（1）土師器，須恵器	33
第25図	出土遺物実測図（2）手捏土器，土師器	34
第26図	出土遺物実測図（3）須恵器	35
第27図	出土遺物実測図（4）木質片	36

図 版 目 次

図版第1図	1 住居址全景……………	45
	2 住居址カマド付近……………	45
図版第2図	1 住居址土器出土状況……………	47
	2 住居址土器出土状況……………	47
	3 住居址カマド付近……………	47
図版第3図	住居址出土土器……………	49
図版第4図	湧水をめぐる特殊遺構全景……………	51
図版第5図	1 〃 (北西隅)……………	53
	2 〃 (南西隅)……………	53
図版第6図	1 〃 (東北隅)……………	55
	2 〃 (東南隅)……………	55
図版第7図	1 〃 (南から)……………	57
	2 〃 石列……………	57
	3 〃 石列……………	57
図版第8図	1 〃 石列……………	59
	2 〃 木質片出土状況……………	59
図版第9図	1 〃 Aブロック土器出土状況……………	61
	2 〃 Bブロック土器出土状況……………	61
図版第10図	1 〃 Dブロック土器出土状況……………	63
	2 〃 〃……………	63
図版第11図	1 手捏土器出土状況……………	65
	2 Dブロック土器出土状況……………	65
図版第12図	1 土器出土状況……………	67
	2 同 上……………	67
図版第13図	1 同 上……………	69
	2 同 上……………	69
図版第14図	1 木質片出土状況……………	71
	2 同 上……………	71
	3 くるみ出土状況……………	71
図版第15図	出 土 土 器……………	73
図版第16図	出 土 土 器……………	75
図版第17図	出 土 土 器……………	77
図版第18図	出 土 遺 物……………	79

第 1 章 序 論

湧水をめぐる遺跡は、原始時代でもかなり古くから存在したものであろう。

水は人間の生存のためにはなくてはならないものであり、そこを中心に生活は営まれている。人間も動物も泉を求めて歩きまわりそこに定着する。稲が作られるようになると水に対する需要はさらにたかまっていくのである。ここ山梨県においては、八ツ岳山麓、曾根丘陵地帯等に湧水をめぐって多くの遺跡は存在し、又現在の集落もそれをとりまくようにして形成されている。

しかし、その水も渴望した人間にはうるおいを与えるが、ひとたび増水すれば人間をおびやかすことになる。

而して「水」に対する渴望と恐怖は、いつしか水への信仰となり神がやどることになる。そして現在までその信仰は、人々の心の中に根強く残り実際に行われているところも多々あろうかと思う。

ここに報告する下成田遺跡は、甲府盆地の東部地域、金川の氾濫により形成された扇状地の末端にある。今回調査された遺跡の内容は、古墳時代の住居址と湧水をめぐる特殊遺構とから成る。

住居址は古墳時代晩期に属し、いわゆる国分式土器を伴う住居址であり標準的なものと言えよう。そこで主として、湧水をめぐる特殊遺構を中心にしながら若干の推察を試み序論としたい。

湧水をめぐる遺跡といえは私共は、すぐに祭祀遺跡を想定する。その方がすなおで理解がしやすいこともあろうし、他にその性格を求める根拠もまた希薄だからである。

湧水をめぐる祭祀遺跡は全国にかなりの類例を見出すことができる。近いところでは長野の駒場遺跡、埼玉の熊谷遺跡等。

そこで私達はこれら祭祀とはいかなるものなのか、祭祀遺跡に的をしぼり理解を深めて見たいと思うのである。

そもそも祭祀（まつり）とは、古代の政治、社会、文化を精神的構造面から分析した抽象的な心的現象である。又およそ人類の住むところ、すべて普遍的に何らかの形をかりて存在するものであろうし、人類共通の営みとも言えるのである。

ともあれ、そういった認識のうえに立てば今回調査された本遺跡は偶然の発見でもないし、又遺物の数こそ少なくあれ、そのもつ意味は大と言わねばならない。

祭祀遺跡のもつ意味は、古代、山嶽、樹木、水霊等を直接信仰の対象にし、その場所において神霊をまつりあるいは宗教的行事が確認できる場所を指すといわれる。この意味からして、この遺跡を祭祀遺跡と積極的に断言することは現段階において未だ早計であらうし、私自身些か躊躇せざるを得ない。なぜなら、ここの場所で祭祀が行なわれたという確実な根拠をみい出

すことが困難だからである。「湧水をめぐる特殊遺構」という遺構名称を用いたのは、この認識のもとに意識的に避けたのである。しかし、早晚、この種の遺構の調査発見は急速に進むであろうし期待するものである。又この下成田遺跡付近一帯の広範囲に亘る調査が行なわれるならば、解明へのなんらかの手がかりを得ることができるに違いない。その日まで私は結論を控えたいと思う。

それにしても祭祀の究明は、いわゆる考古学的方法—残された遺構・遺物を通して当時の社会・文化を探らんとする方法—からすれば、対象が心的現象なるがゆえ、至難の業と言わねばならない。しかしその点、今日、ここに報告するに、私はより客観的な立場で、赤裸々な遺構、遺物の姿を報告することに自信をもっている。それ以上の独断的論究は慎しまねばならないのではないか。

本調査は行政主体による発掘調査ゆえ、調査区域は勝沼バイパス路線内という本来的な制約があり、しかも調査期限が限られており思うようにはいかなかったことは事実である。又この報告書はごく短期間の報告のためほんの概報しか発表できずじまいであるが、一応の調査報告としたい。今後なんらかの紙面をかりて補足しながら遺跡の全容を究明していきたいと考えている次第である。

最後であるが、発掘期間中、大場博士を初め、小出義治氏、上野晴朗氏、山本寿々雄氏には、現地に調査にきていただき、かつ数々の御指導をいただいた。私達未熟な学究にとってなによりもありがたく、力強い限りであった。あらためて深く感謝の意を表するものである。

又、長い調査になったため、県教委、建設関係者、付近の皆さんにもいろいろご迷惑をおかけした。同時に深くおわびしたい。

また、報告の中にも私達の未だ未熟な関係上、考え違い、誤り等が多々あろうかと思う。この点、今後ともご叱正、ご教示をいただきたいと考えている次第である。 (萩原三雄)

第 2 章 遺 跡 の 立 地

I 位 置 と 環 境

本遺跡は、東八代郡御坂町下成田に在り、町の西端部で笛吹川左岸に接しており、海拔270～274mの地点にある。

本遺跡の地理的な位置は、笛吹川氾濫原に接し西北方へ傾斜する金川扇状地の末端部であると言える。

金川扇状地は、甲府盆地の陥没によって出来た断層崖下に、金川の運搬土砂が推積したものであり、推積物は、金川上流御坂山地の構成岩質である花崗岩の破屑物を主として、これに御坂層、小仏層の破屑物が混在するものである。本扇状地は、概して地層は厚く、表流水は少ない。しかし、地下伏流水は豊富であり、地下水面は、扇頂部で最も深く、扇央部ではやや浅く、扇端部で最も浅い。また、扇端部付近では場所により、地下水面が地表面より高くなり、地下伏流水が湧出する。すなわち、これが湧泉である。

本遺跡は扇端部にあつて湧泉地帯に属し、地下水面は浅く、そのため付近では、戸ごとに掘抜き井戸を持っている。現在は果樹園地帯であるが、往古より近年に至るまで、水田地帯であった。

本遺跡付近の気候は、甲府盆地中央部と比較して気温、湿度はやや低く、年間降雨量はやや多い。又、冬期夏期の季節風は弱く、いわゆる、内陸盆地特有の大陸性気候が、緩和されたものと考えられる。

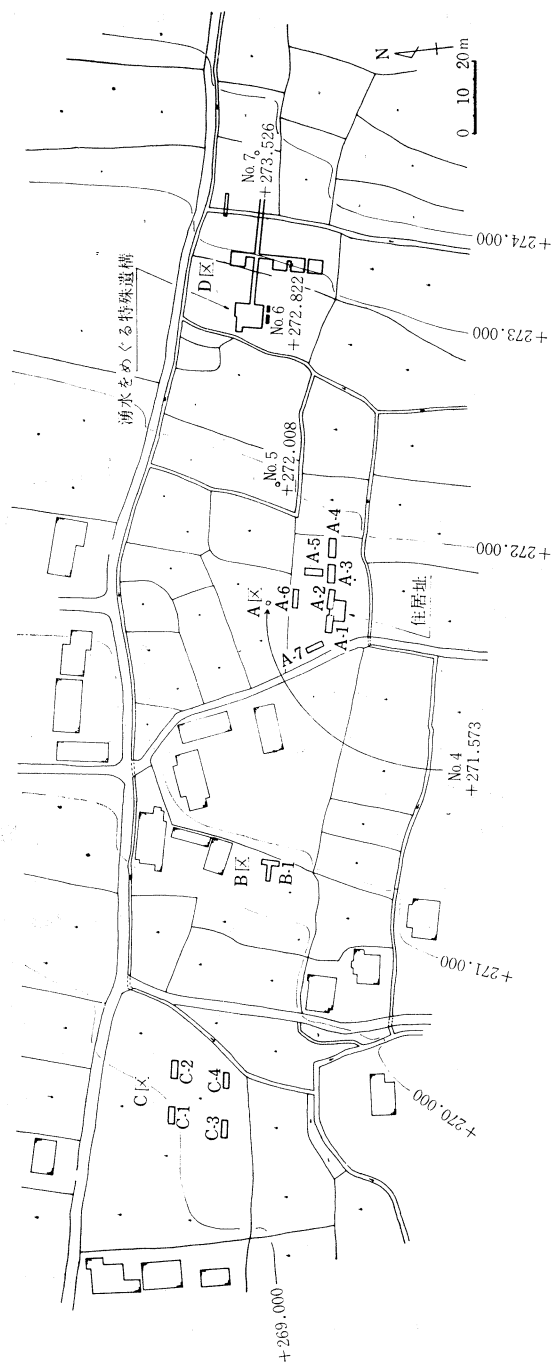
本遺跡の属する金川扇状地左岸部は、縄文、弥生、古墳及び奈良、平安各時代の遺跡が群在している。本町桂野、竹居等の縄文期遺跡の濃密な分布は、曾根丘陵を中心とする笛吹川左岸地域の縄文期遺跡分布地帯の一部であると言われている。又、井上、成田等には弥生期遺跡が濃密に分布している。夏目原、二宮、井上、成田等に分布している古墳期の遺跡は前記の縄文期遺跡と同様に、笛吹川左岸地域の古墳期遺跡分布の一部を形成している。

本遺跡南方約300mには既往の水田地帯の只中に特異な亀甲塚古墳、井上には本遺跡東南東約1.6kmに関東第1の横穴式石室を有する姥塚古墳等が存在する。また、本県二の宮として名高い美和神社は本遺跡の南南東約1.7kmにあり、甲斐国政庁所在地であると言われる国衙は南東約1.3kmにある。

なお、本遺跡地点は、扇状地左岸部の西部を覆う条里遺構と推定される地点の縁端部にある。かつ、遺跡の近くを旧鎌倉街道が通じており、さらに金川右岸東方約3.6kmに甲斐国分寺跡がある。



第1図 遺跡付近地形図



第2図 下成田遺跡区域地形図

ここに、本遺跡と前述の諸遺跡群とを時間的、空間的に組み合わせて考える時、興味津々たるものがある。すなわち、これを総合するならば、本遺跡の地理的な特徴は、金川扇状地の末端部にあると共に、条里遺構と推定される地域の縁端部に立地し、この地域の往古の水田農耕の発生地位置するものと考えられる。(早川方明)

参考文献

「御坂町誌」御坂町役場

「全国遺跡地図」文化財保護委員会

「地下水探査法」古今書院

Ⅱ 礫の起源

本遺跡は、扇状地の扇端附近に築かれた土師遺跡であり、附近一帯は礫層が堆積している。この礫層は住居址においても、湧水をめぐる特殊遺構においても遺構と重要な関連性をもっている。その意味からして本遺跡の地形的、地質的背景を考慮することは重要な意味をもつと思う。まして祭祀的要素の強い遺跡であればなおさらである。したがって、各トレンチの礫を検討し、起源について述べたいと思う。

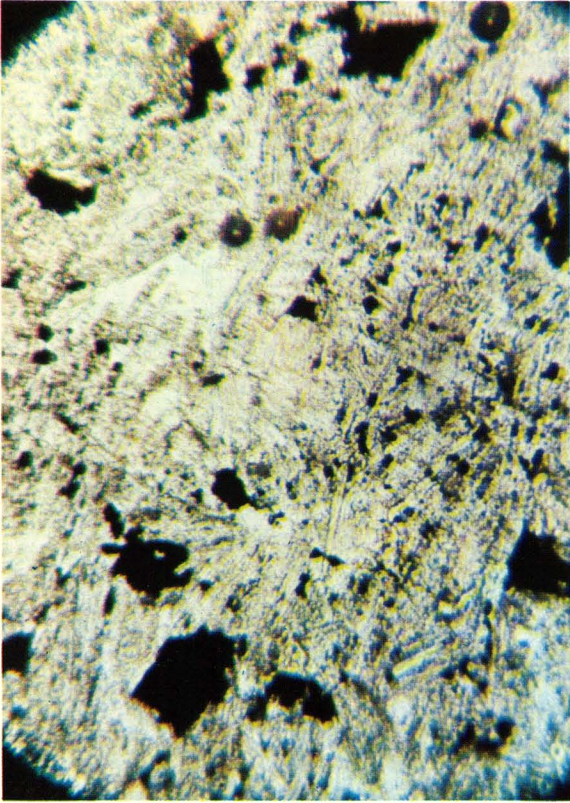
そこで各トレンチの礫の種別を行ない、また明らかに、礫層が砂層あるいは粘土層などによって層序が細分されている場合は、その層序にしたがって検討した。これらは当扇状地の扇端近くであり、笛吹川の堆積とも考えられるのでこれらの礫がはたして金川あるいは天川によるものか、笛吹川によるものか識別することを目的としたものである。

山梨県地質誌(註1)によれば、笛吹橋より上流の地質は、徳和型花崗閃緑岩、小鳥型石英閃緑岩、水ヶ森火砕岩類、瀬戸川層群、三富層などである。また、金川、天川の流域の地質は、徳和型花崗閃緑岩、芦川型石英閃緑岩、輝石安山岩、春木川累層、御坂層群に属する小沼、高萩累層などである。これらの内で金川あるいは天川による堆積か否かを判断する場合、玄武岩を含む小沼・高萩累層が基準として適当であると思われる。そこで金川扇状地の表層の礫に粗粒玄武岩が含まれているか否かを検討したところ表に見られるような結果が得られた。したがって当扇状地においては少なくとも表層に関してのみは、金川あるいは天川による御坂山塊の浸蝕によって生じた花崗閃緑岩、石英閃緑岩、輝石安山岩、御坂累層の各礫による堆積であると考えられる。

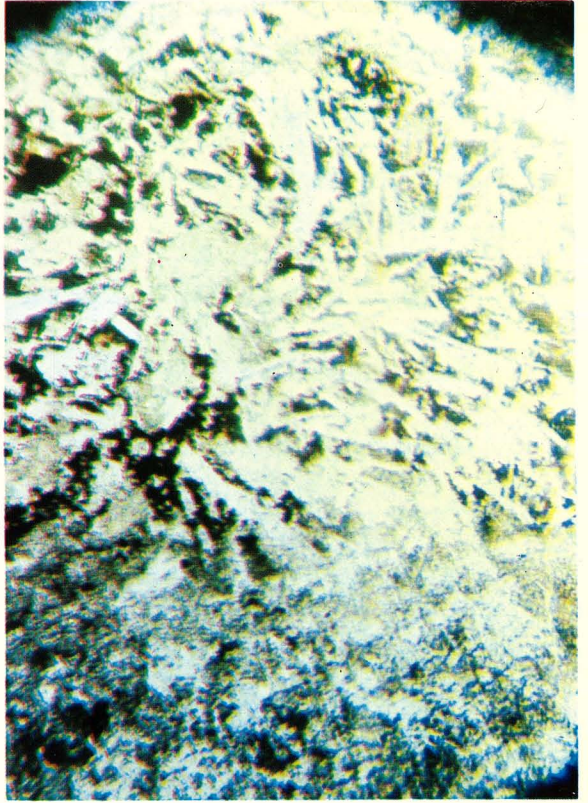
さらに推論を許されるならば、A2トレンチとD区とを比較した場合、A2トレンチにおいては、表層土・礫層・砂層そして礫層の順で堆積しており、住居址は、その砂層下部で構成されていた。またその層がD区では見られなかった。このことは、A2トレンチが標高ではD区より低く、また笛吹川との標高差があまりないことを考慮すると、あるいは一時期、笛吹川の影響があったのではないかと考えられる。(上原 稔)

(註1) 山梨県地質誌、山梨県地質図編纂委 1970

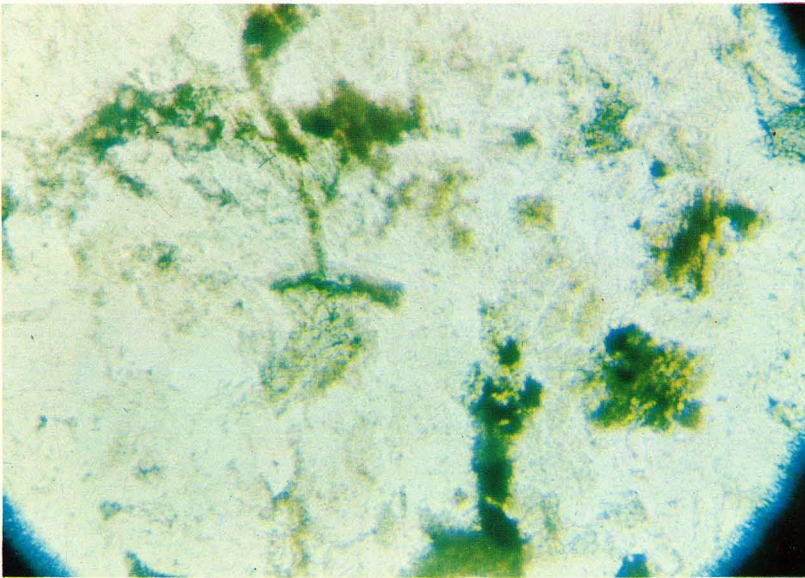
1



2



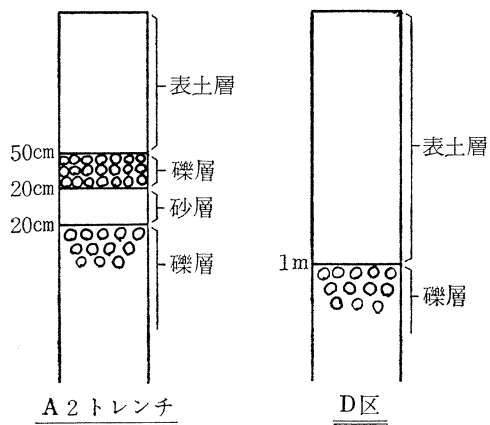
3



1, 2 玄武岩
3 石英閃緑岩

第3図 A区及びD区礫の顕微鏡写真(直交ニコル)

A2トレンチ・D区における地層図



各グリッドの礫の岩石名表

トレンチ名	岩石名
A2トレンチ	輝石安山岩・石英閃緑岩 玄武岩
A2トレンチ・3層	石英閃緑岩・玄武岩
A2トレンチ・7層	石英閃緑岩・玄武岩 輝石安山岩
A3トレンチ	花崗閃緑岩・石英閃緑岩 玄武岩
D区	輝石安山岩・花崗閃緑岩 石英閃緑岩・玄武岩

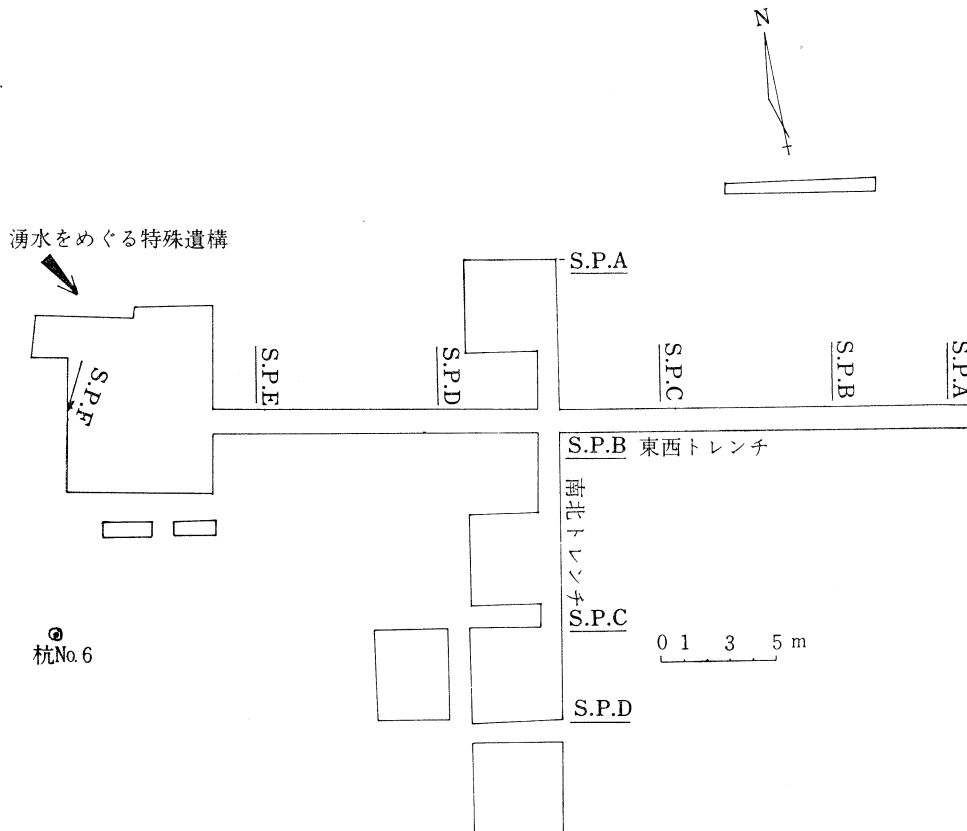
第3章 調査の経過

山梨県遺跡調査団が県教育委員会に委託されて勝沼バイパスの予定路線内を発掘調査することになったのが47年春であった。

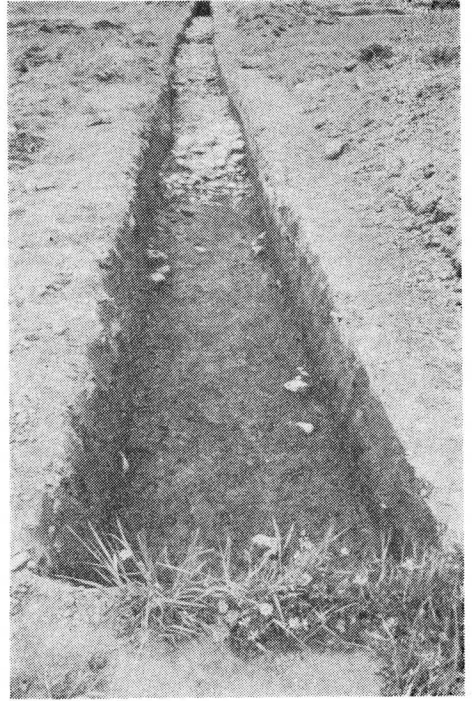
発掘調査に先だって野沢昌康氏を主任として東八代郡御坂町及び石和町内を通過する予定路線内を踏査し分布調査をしたところ、御坂町下成田くろつと黒頭及び松の木田下割に2,000m²以上の土師器と須恵器の薄い散布地を確認し、予定路線はこの北側をかすめて通過していた。ここは又一宮町、御坂町、石和町、八代町、境川村につながる条里制遺構と言われる（「山梨県史跡名勝天然記念物」）場所の末端にあっている。更にこの東方にも路線内に石和町中川小字赤井と御幸道に5,000m²以上に広がる土師器・須恵器の濃厚な散布地があった。

本遺跡は発掘調査の結果から2区分することが出来る。

すなわち住居址と湧水をめぐる特殊遺構とである。発掘当初は住居址と条里制遺構の確認を想定していたので発掘期間も比較的短い計画であったが、条里制遺構を確認するトレンチで偶



第4図 湧水をめぐる特殊遺構 トレンチ設定状況



第5图 D区 礫面出土状況

然石が敷き並べてあるような場所を発見したのでこれを新たに発掘することになったため長期間を要することとなったのである。

調査（含測量）の経過の概略を日程で示すと以下のようである。

- 1 住居址を含むA区（第2図）昭和47年3月16日～3月20日
 - 〃 4月1日～4月2日
 - 〃 4月29日～5月2日
- 2 B区及びC区 〃 3月18日～3月20日
- 3 湧水をめぐる特殊遺構(D区) 〃 3月19日～3月20日
 - 〃 4月1日～4月2日
 - 〃 4月29日～5月7日
 - 〃 5月21日
 - 〃 10月8日～10月12日（但本格的には5月3日から）

3月16日発掘開始日にA区から始めたが、10年位前までは水田であったので床土（水田の耕作土の下にある粘土層でかたい。）があり、一部（A—1，A—2，A—3トレンチ）は氾濫の跡と思われる地層もあり、非常に作業が困難であった。

住居址らしい遺構が見つかったのが3月19日であり、この調査がほぼ終了したのが5月2日であった。

B区C区は土器散布は少量であったが、トレンチを設定し3月18日から20日まで発掘したが、土師器・須恵器が、少し攪乱された地層から出土したに過ぎなかった。

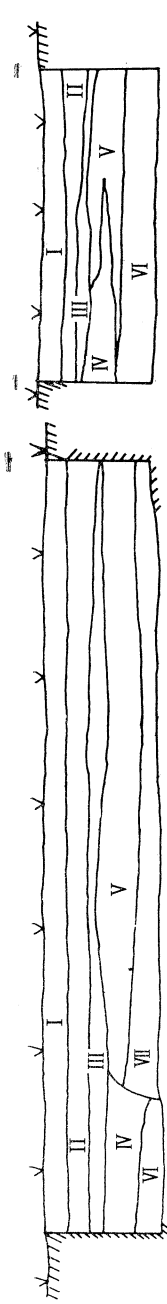
D区は3月19日立川実造氏と相談して、条里制遺構を地層的に確認するために南北に通った直線に近いトレンチを畦畔と直交して入れたところ、小石を敷き詰めと思われる場所（第5図）と集水暗渠（水道又は冷^{ひえぬき}拔と言われ、現在まで新しく設置されたり使用されている。）が出土した。これについて地主や付近の古老に言い伝え等を詳しく聞いたが、礫層があったことは全く知らなかったので、山梨県遺跡調査団幹事会々議にはかり1遺構とみなして調査を続行することになったのである。結局これが湧水をめぐる特殊遺構と確認されたのが、5月5日頃であった。

5月20日には山梨県埋蔵文化財講習会の講演の帰途、大場磐雄先生に現場を見ていただいて御教示をいただき、6月15日には小出義治先生もお願いして御指導をいただき、6月17日には、山本寿々雄先生がおいでになって御助言を受けた。

6月下旬には周囲の水田の田植用水でトレンチが満水になり、発掘不可能になるので延期し、10月8日に再開し、10月12日、全部の発掘を終了した。（渡辺礼一・森 和敏）



第6图 上 発掘状況
下 D区 礫面出土状況

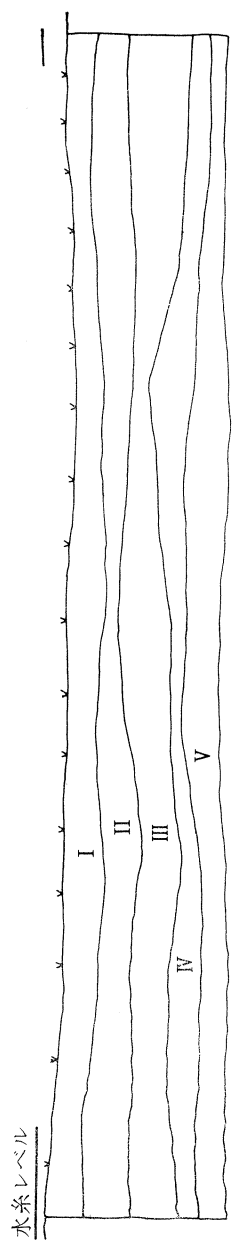


A-1 トレンチ北壁セクション図

同、西壁セクション図

- I - 耕作土層
- II - 床土層
- III - 礫を含む黒色粘土層
- IV - 酸化礫層
- V - 酸化砂層
- VI - 酸化礫を含む砂層
- VII - 細かい砂層

第7図 A-1 トレンチ北壁及び西壁セクション図

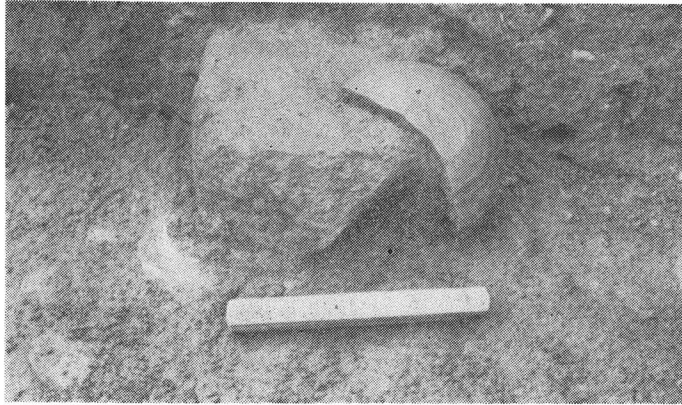


- I - 耕作土層
- II - 床土層
- III - 礫を含む黒色粘土層
- IV - 酸化礫層
- V - 酸化砂層

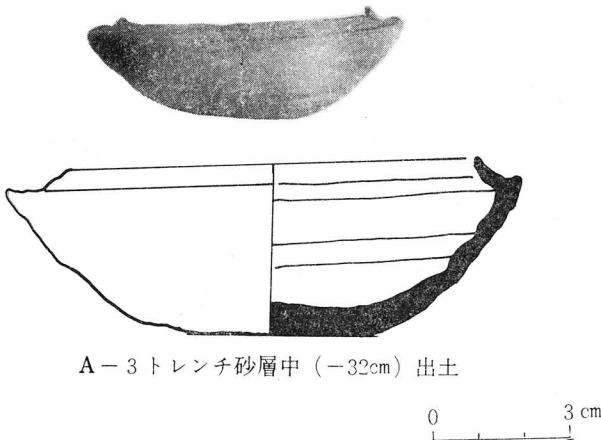
第8図 A-2 トレンチ北壁セクション図

第 4 章 A—3 トレンチ出土遺物・須恵器 (第 9 図)

トレンチの壁ぎわ，表土から 32 cm のところから砂礫層に混じり単独で発見されたものである。遺構は認められず氾濫により押し流されてきたものと思われる。



第 9 図 A—3 トレンチ須恵器出土状況



A—3 トレンチ砂層中 (-32cm) 出土

須恵器 (第 10 図)

全体的に小型である。たちあがりは矮少化し，内傾の度合いが大きい。受部は水平に外方へのびている。体部には 2 条の凹線が認められ，底部は扁平であり粗雑である。

たちあがり，受部，体部，調整方法等より，時期的に 7 世紀初頭から中葉ぐらいに位置するものと思われる。(萩原三雄)

第 10 図 須恵器実測図

第 5 章 住 居 址

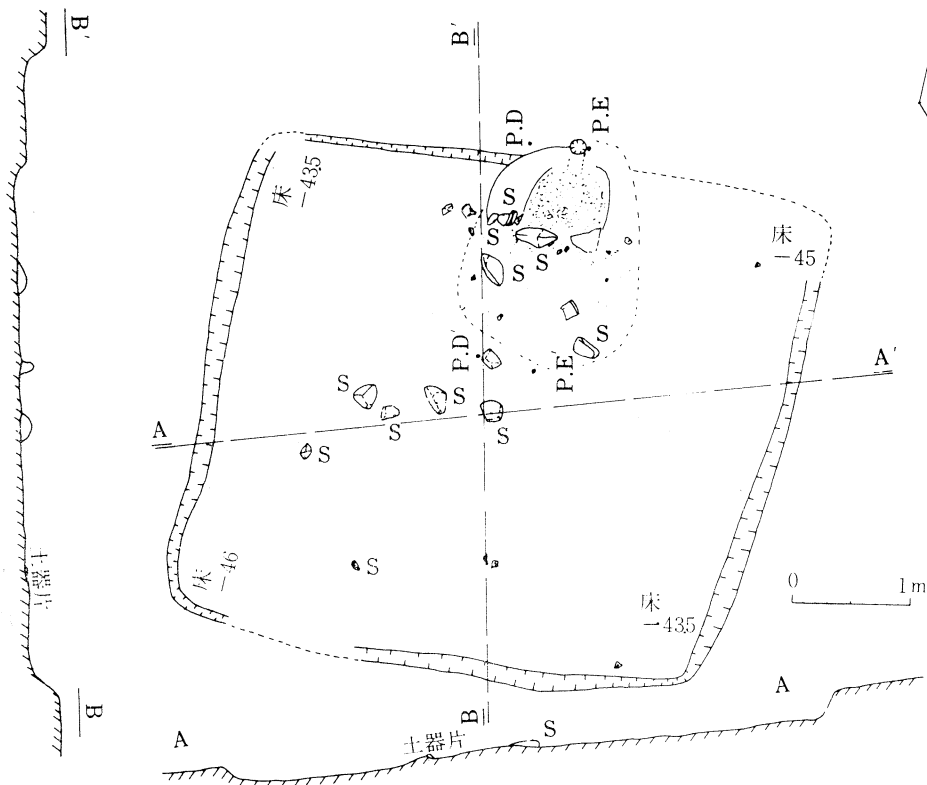
I 遺 構 (第11図)

本県における古墳時代の聚落の調査研究の報告例は、昭和25年当時に小出義治、上野晴朗両氏によって報告された日下部中学校校庭聚落遺跡の報告事例^{註(1)}より、最近の山本寿々雄氏等により報告された甲斐国分寺周辺聚落址の報告^{註(2)}に至るまで何カ所か知られている。近県においては、東京 中田遺跡、長野 平出遺跡など注目すべきものが多い。また、近年は、発掘調査そのものが、点より面に移行しており、その成果も目を見張るものがある。

今回調査された住居址は、一軒のみであるが、遺構近くには既に数カ所住居址と推定される場所があり^{註(3)}、やはり聚落を構成するものと想定される。

本住居址のプランは、東西 5.0m 南北 4.4m のほぼ隅丸方形を呈する。単独住居址で複合は認められない。

図のようにカマドの位置は、住居址の北壁ほぼ中央に設けられ、住居址内の焼石、粘土の状



第 11 図 住居址実測図

況により、芯に石を用いた構築状態を示している。煙道部は、カマドほぼ中央より、北方へ認められる。壁高は、北面で 20 cm、南面で 25 cm あり、床状態は住居を砂層上に構築しているためか、確認が非常に困難で、わずかに粘土が敷きつめられている程度である。柱穴、周溝は検出する事ができない。

土器の出土状況は量的にかなり多いが、細く破砕され、形状が確認できるものは少ない。

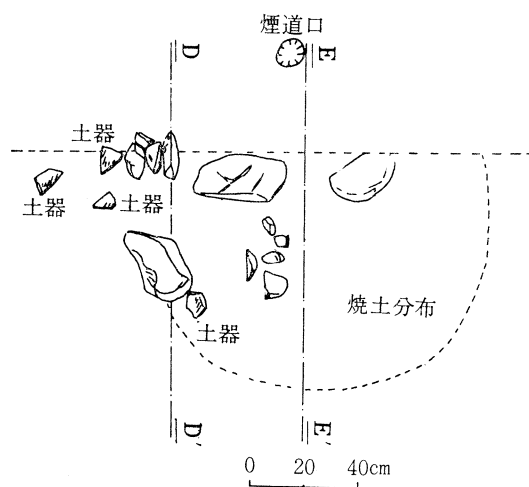
本住居址は、その後の氾濫により破壊埋没された如き様であり、覆土は礫で占められている。また、カマド付近微細図（第12図、図版第1図の2）の如き状況を示し、カマドなども、押しつぶされ、しかも西方へ流出された感も受ける。そのためか、住居址の保存状態は悪い。

（萩原三雄）

註(1) 山梨県日下部中学校校庭聚落遺跡概報 小出義治, 上野晴朗 上代文化第19号

註(2) 甲斐国国分寺周辺聚落址の調査 山梨県教育委員会 山本寿々雄ほか

註(3) 付近の畑から耕作中、焼土、土器類、床面等の発見が、数カ所所有者から伝えられている。



第 12 図 住居址カマド付近微細図

Ⅱ 遺 物

本住居址における出土遺物は、そのほとんどが土師器であるが、その他若干の須恵器小破片、手捏土器等が検出されている。土器類はほとんど破片のみであり復原でき得ないものも多数あるが以下、出土遺物中器形が判明でき得たもの、形態等明らかになったものについて概述してみよう。

(1) 土 師 器

土師器は量的に出土遺物の大半を占め、その器形から甕形、壺形、碗形の三種に分類される。また、それぞれ形状、整形法から更に細別が可能である。

甕形土器（第14図2～7）

すべて胴長の器形を呈すが、口縁部の形態等から更に三類に細別できる。

甕1類（7）

水平に外反する口縁をもつ。胎土に少量の砂粒を含む。色調は褐色を呈し、一部に二次火熱を受けて黒色を呈す。焼成は良好である。外面は縦方向の刷毛目痕、内面は口唇部にかけて斜めに刷毛目痕が残る。

甕2類（3・4）

外反する口縁をもち、胴部はふくらみをもちながら底部に至ると思われる。色調は褐色を呈す。胎土、焼成は普通で少量の砂粒を含む。

甕3類（2・5・6）

やや外反する口縁をもつが2類より胴部のふくらみがゆるやかである。胎土、焼成は普通で少量の砂粒を含む。第二次火熱を受け一部が黒色を呈す。

壺形土器（第14図1）

「く」の字状に鋭く外反する頸部から、そのまま球形胴部につくと思われる。器肉は薄く胎土、焼成は良好で色調は褐色を呈している。胎土に少量の砂粒を含んでいる。外面に刷毛目痕が認められる。

底部のみの土器（第13図3～10）

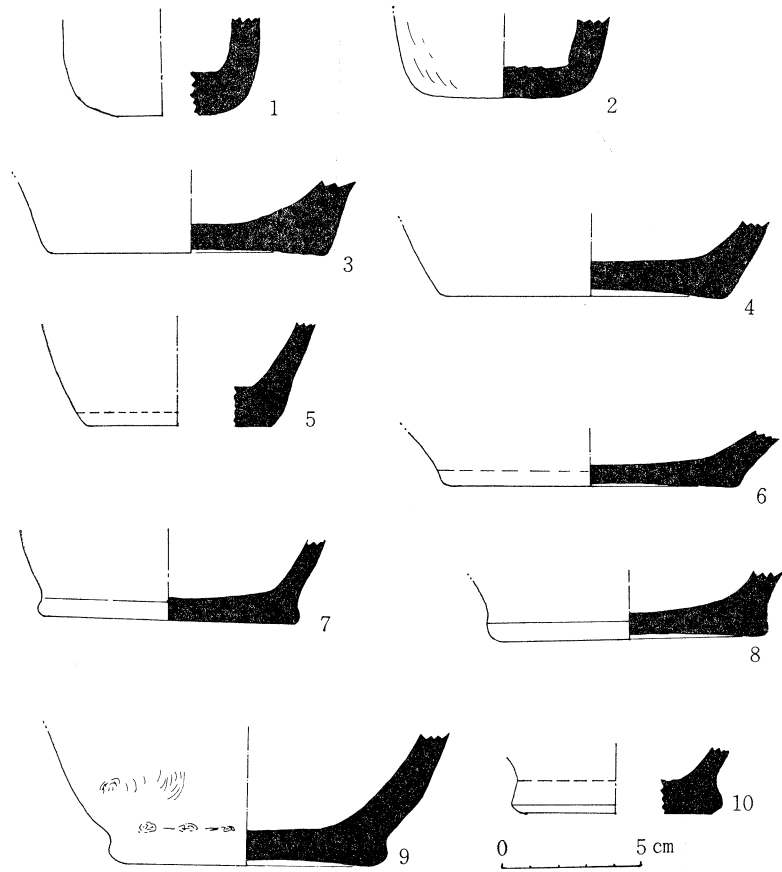
ほとんどが、底部のみで器形は明らかでないが、底部は平底で木葉痕が描かれる。全体として安定した器形となっている。器肉は厚手で胎土、焼成は普通。色調は褐色を呈する。底部がわずかに窪み底となっているものもある。（3・4・6・8・9）

碗形土器（第14図8）

器肉は薄く、内彎している。胎土は精製されており焼成は良好である。器面は内外面ともになめらかである。色調は褐色を呈し、二次火熱を受け、黒味を帯びている。

(2) 須 恵 器

三片程検出されたが、うち二片に自然袖が認められる。



No. 1, 2 手捏土器

No. 3~10 土師器(全て木葉痕底)

第13図 住居址出土遺物実測図(1)

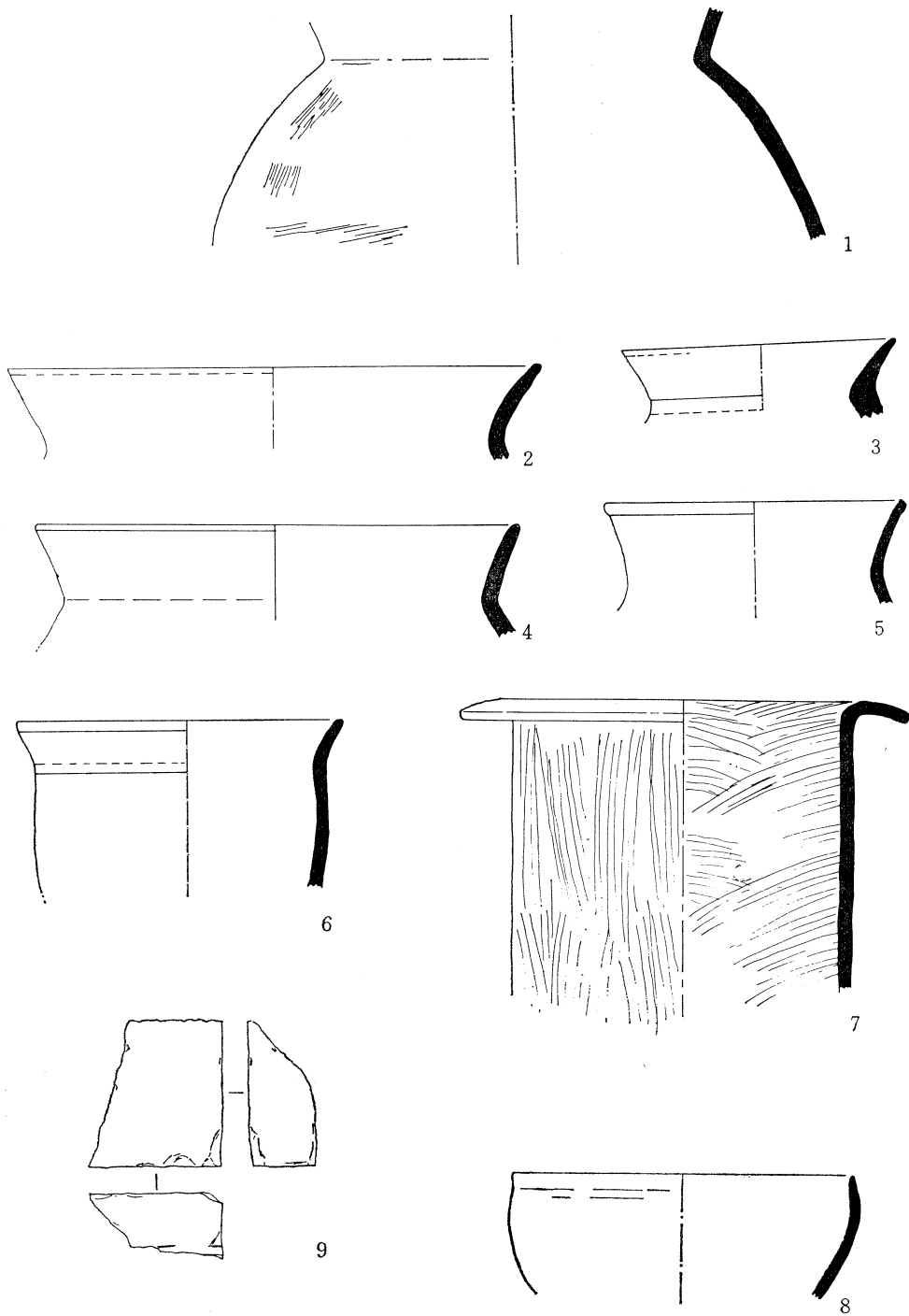
(3) 手捏土器(第13図1・2)

厚手の小形粗製土器。口径と底径はほぼ同じであり、いわゆる臼状を呈す。胎土は粗雑でもろい。

(4) 砥石状石器(第14図9)

三面が人為的に磨かれている。

以上が住居址から検出された遺物の大要であるが既にくり返してきたとおり、本住居址の保存状況は極めて悪く、反面、遺物の量も非常に多く時代決定を困難にしている面がある。また、遺物も全形が窺えるものが少なく時代決定の基礎となる遺物は多くないが、主なる遺物、特に床直上面から出土したものだけ取り出し、これを手がかりとして推察してみよう。



No. 1 ~ No. 8 土師器

No. 9 砥石状石器

0 5 cm

第14图 住居址出土遺物実測図(2)

甕形土器は、いずれも長胴の傾向を示しており形態的にいわゆる国分式土器といわれるものである。また底部のみでその全形を窺えないが第13図3～10もほとんどその範疇に含めて良いと思う。若干底部張り出しをもつ形態は国分式でも古手のタイプであろうか。

第14図1の壺形土器は古手の様相を示し、更に第14図8の椀形土器にしても鬼高期の様相を示しているがいずれも住居址履土からの検出であり住居址に伴わないものとして良いと思う。

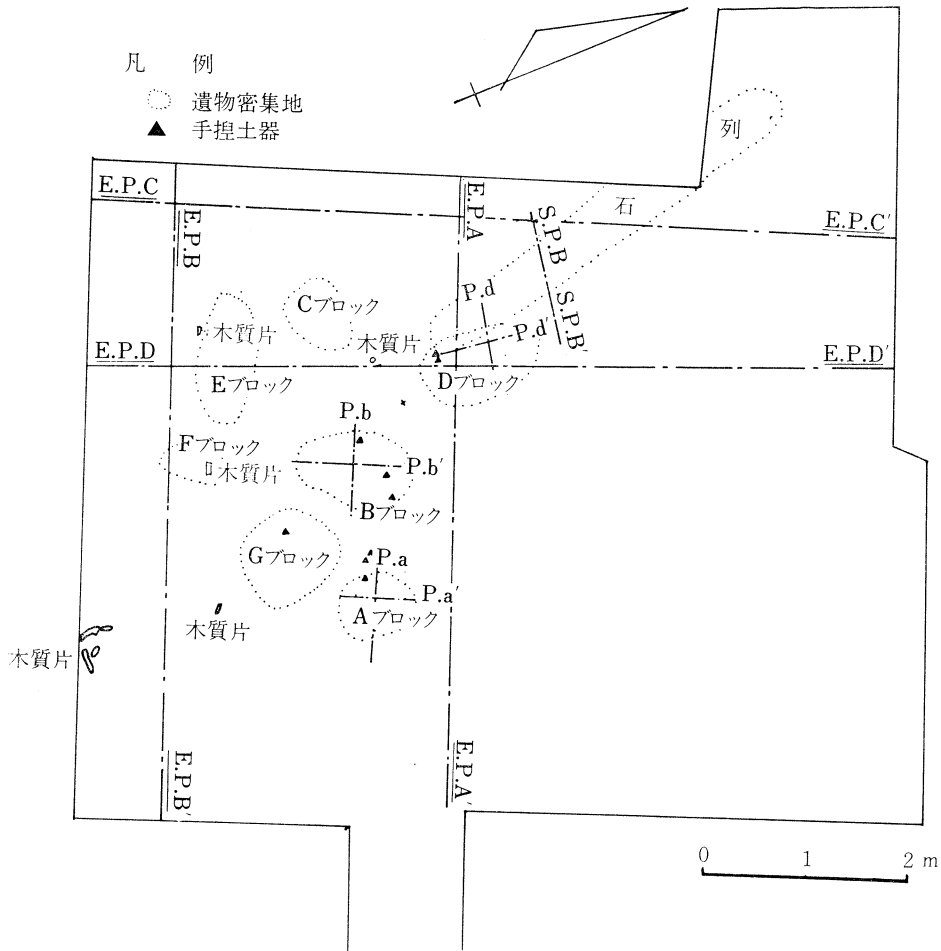
いずれにしても本住居址の構築、使用年代は細別まで至らなくわずか国分期としてとどめておきたい。

第 6 章 湧水をめぐる特殊遺構

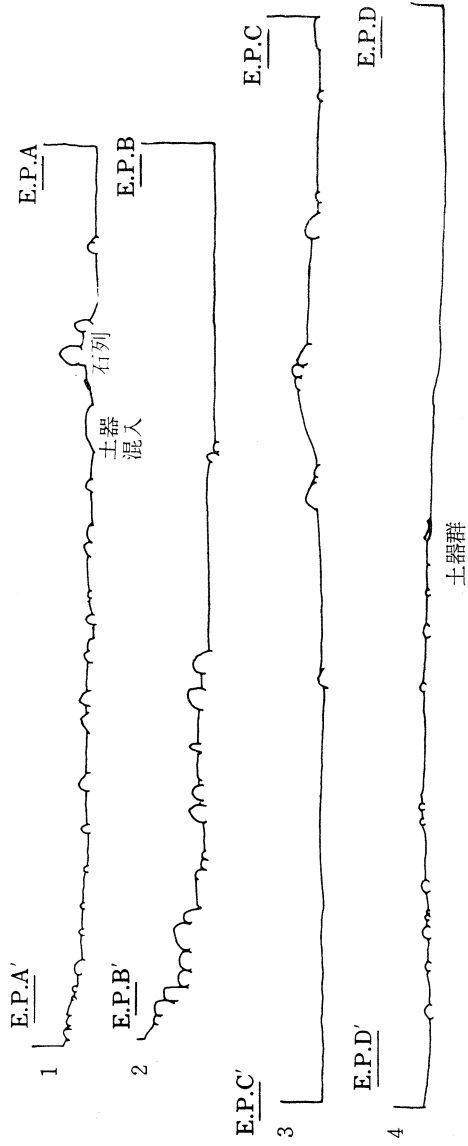
I 遺 構 (第15図～第23図)

本遺構附近は、過去における金川の河川床か、氾濫で形成された礫層、砂層地域である。本遺構もその礫層内に存在するが、礫面は、西方へむかう地点で第22図の示す如くわずかな角度をもちながら傾斜し、一段落ちたところで平地を構成している。その礫面に多量の土器片を検出したことによって本遺構は発見された。

また、グリッドの南西部には礫の殆んど存在しない場所があり、そこからは地下水が浸出する。事実、そこに堆積する砂層にも青味を帯びた、過去に湧水した場所の如き地点が数カ所確認されている。



第 15 図 湧水をめぐる特殊遺構



1, 東西(A-A')No.6 杭より+42.5cm 2, 東西(B-B') No.6 杭より+68cm
 3, 南北(C-C')No.6 杭より+45cm 4, 南北(D-D')No.6 杭より+42.5cm

第 16 図 湧水をめぐる特殊遺構エレベルション図

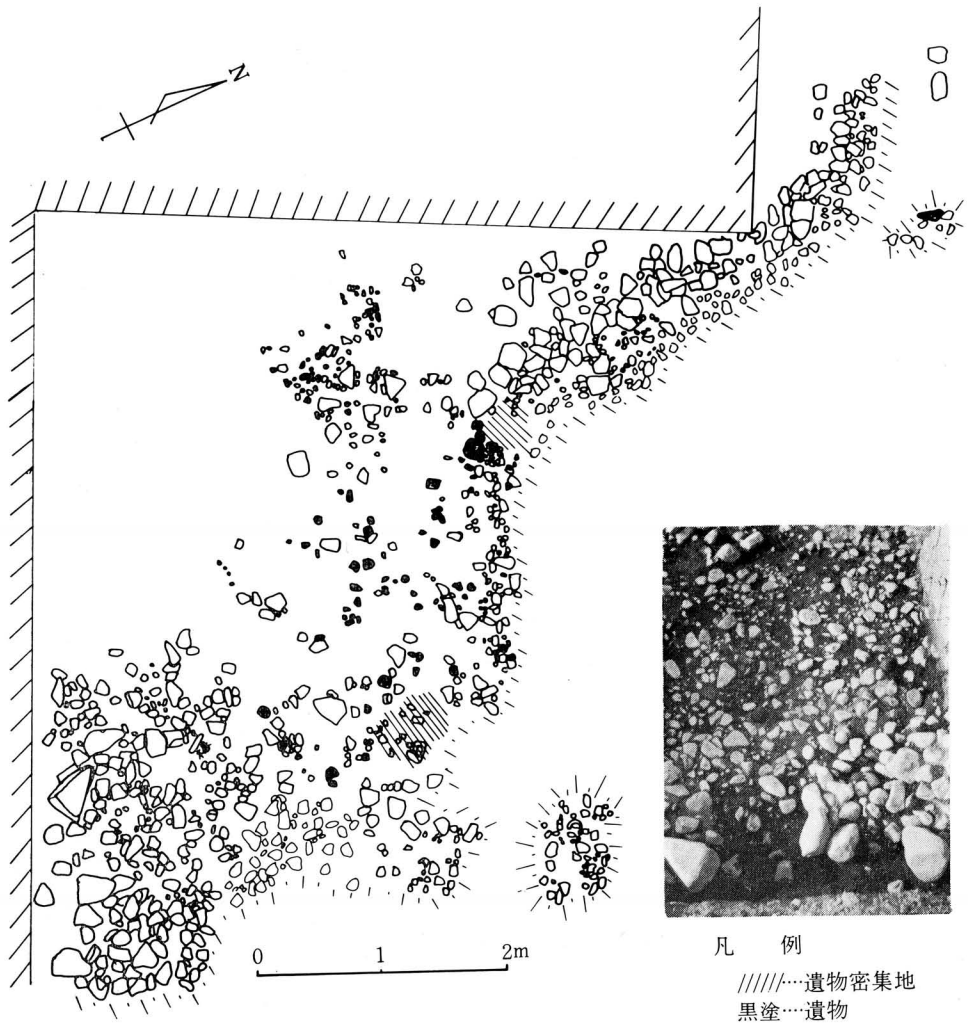
遺物はその殆んどが、故意に細かく破碎されたかのごとく一面に散在し、器形をとどめるものは少ない。その中でもA—Gブロック（第15図）にはあたかもフンドが構成されているかのごとく集積していた。各ブロックからは、土師器、須恵器、手捏土器、木質片などが検出されている。しかしながら、整理の段階で1～2個体が各ブロックに散らばっている状態が確認されて、結局各フンド個別とは言い難いことが判明した。遺物は、手捏土器を除き、土師器、須恵器ともその殆んどが日常什器である。

礫面は北方へもわずかに傾斜しているが、その湧水地区と思われる地点へ北方からの石列が認められる（第15図、第17図）。この石列は、こぶし大の自然石を交互に重ねた状況を示し、長さは5 m程である。

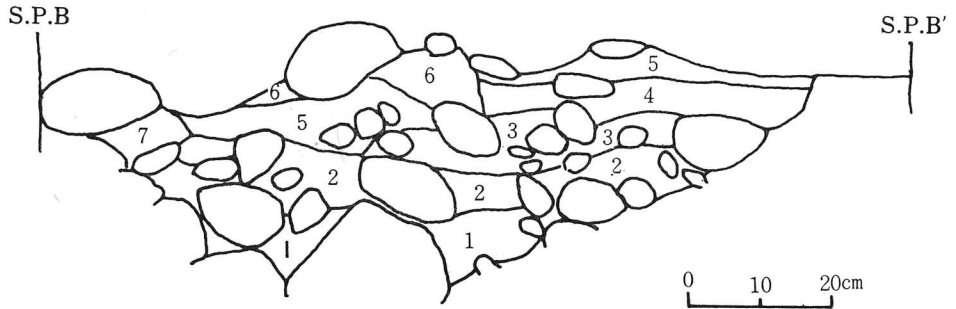
これに関連して、付近には、現在も使用されている「冷え抜き」と呼ばれる集水暗渠が点在し、本遺構地帯にも見られた。遺構内の石列は、その「冷え抜き」と頗る類似している。しかし、第22図のセクション図に見られるように、上からの切りこみは一切なく、遺構と同時期であると考えてよい。さらに、この石列と接触して手捏土器が2つ重なって検出された。

A—Gの遺物群は、主に湧水する砂層地区の周囲に散在しており、それぞれ1 m内外の集積を示している。その殆んどが土師器、須恵器で占められているが、それに混在して手捏土器が伴出する。

また注目すべきことは、湧水地区の周りから杭と推定される木質片が三、四カ所確認されている。またその近くから木の実も検出された。（萩原三雄）

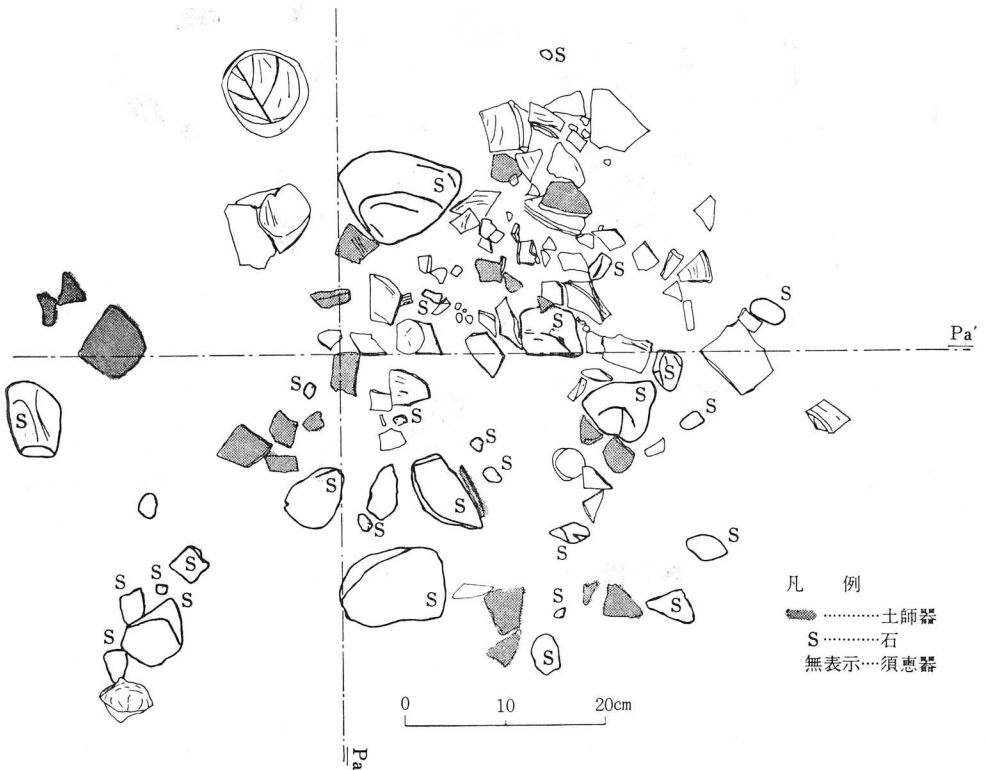


第 17 図 湧水をめぐる特殊遺構実測図



第18図 石列セクション図 (SPB-SPB')

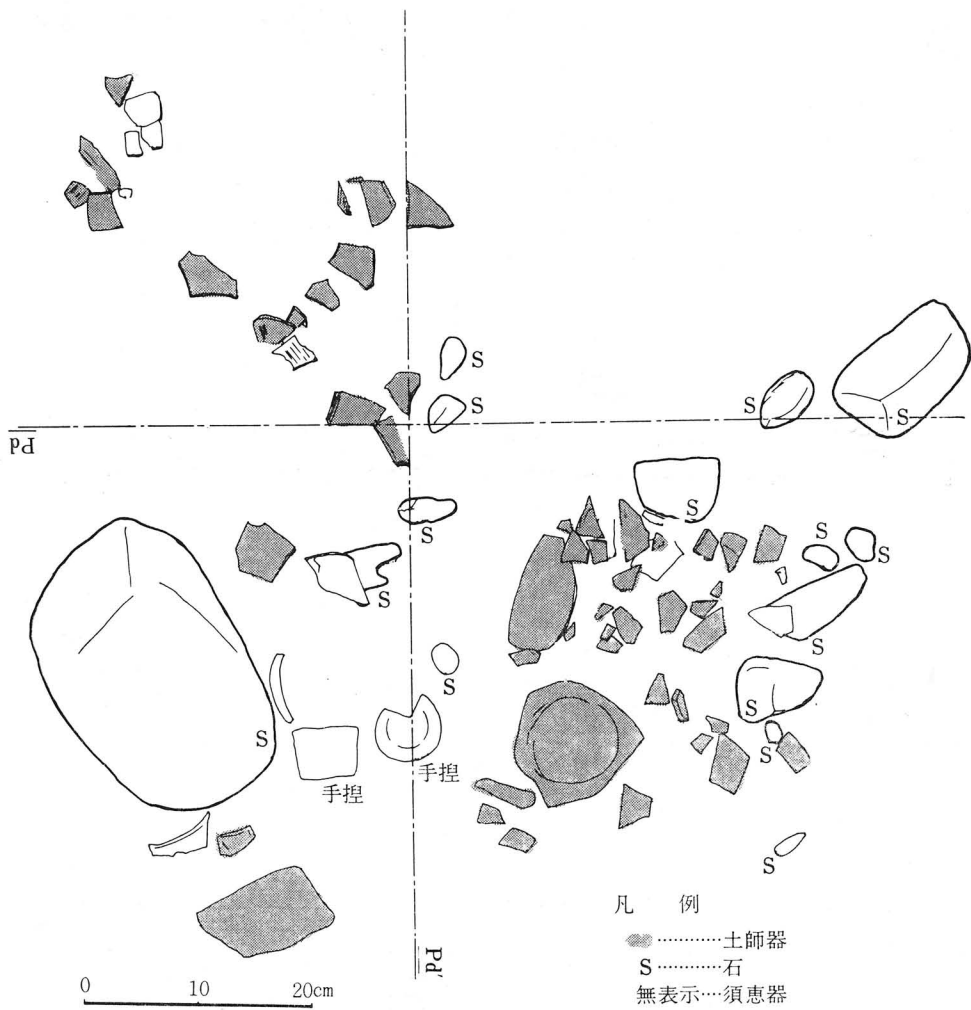
- 1層 やや大粒の砂中に小石を含み水がわきでてくる。やや青色っぽい。
- 2層 1層より粘土(褐色)を若干含む。小石は1層より多い。黄色っぽい暗褐色土。
- 3層 ごく少量の石を含む。砂層でサラサラしている。やや白っぽい褐色砂層。
- 4層 3層より密度濃く粒子は細かい暗褐色砂層。
- 5層 4層中に粘土ブロックを含む。ややしまった暗褐色土。
- 6層 4層とほぼ同じ。粘土ブロックはなく全体にしまっている。
- 7層 暗褐色の粘土に極く少量の砂を含む。



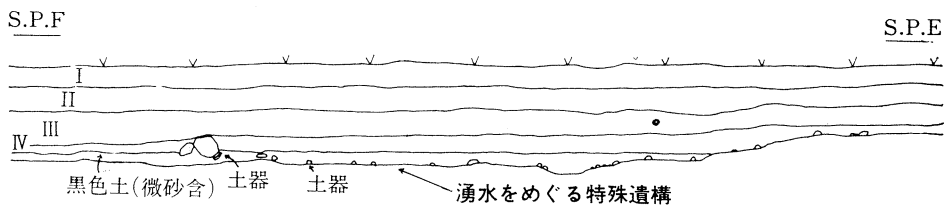
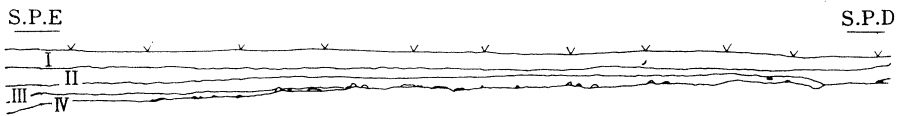
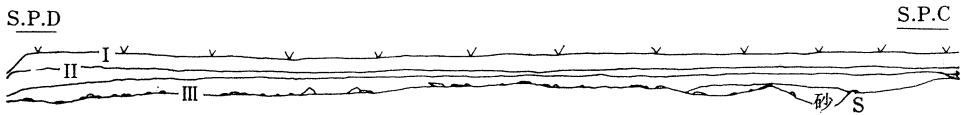
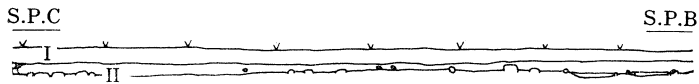
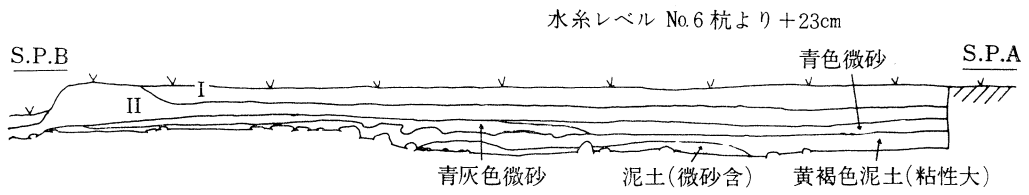
第19図 Aブロック微細図



第20図 Bブロック微細図



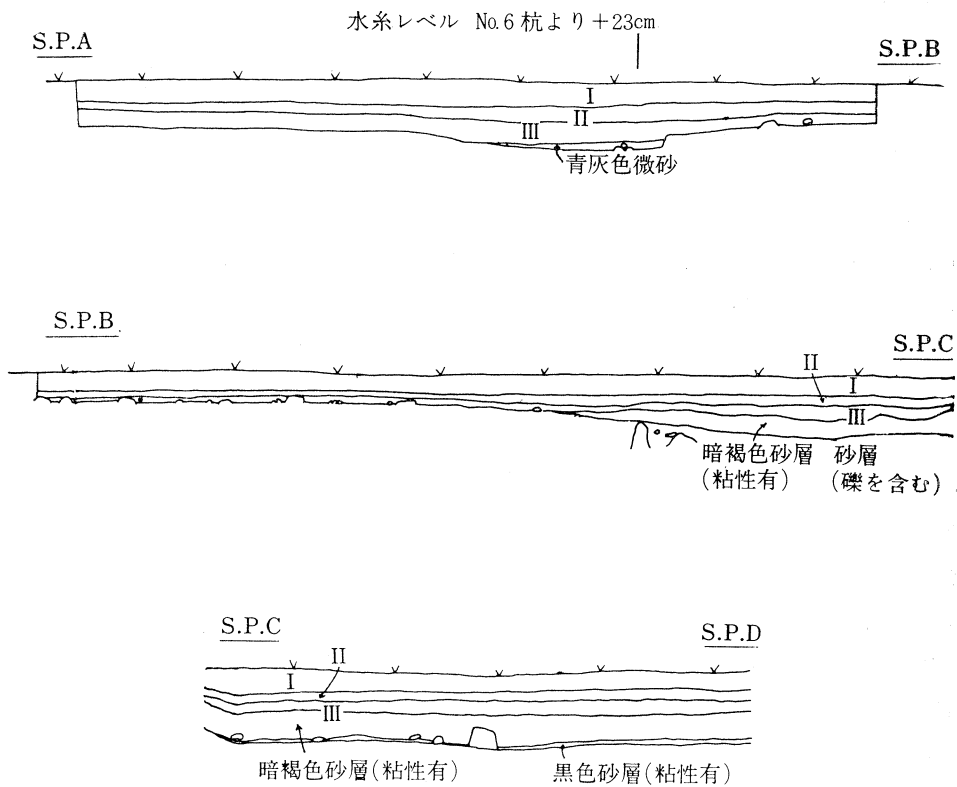
第21図 Dブロック微細図



凡 例

- I 耕作土層
- II 床土層
- III 暗褐色土層(小石及び遺物を含む粘性大)
- IV 黒褐色土層(粘性さらに大)

第 22 図 D区東西トレンチ北壁セクション図 (S.P.A—S.P.F)



- 凡 例
- I 耕作土層
 - II 床土層
 - III 暗褐色土層

第23図 D区南北トレンチ東壁セクション図 (S.P.A—S.P.D)

Ⅱ 遺物 (第24図～第27図)

本遺構における出土遺物は、土師器、須恵器、手捏土器、木質片、木の実であり、そのほとんどはA～Gのブロックに密集して、礫層の中に発見された。うち、AおよびCブロックは主に須恵器片であり、また、BおよびDブロックからは、土師器片が主であった。

(1) 土師器 (第24図1～3, 5～8, 第25図17～19)

形態から杯形および甕形土器であり、完形のものはなく、すべて破砕されている。それらは器形のもつ特徴によって、いずれも細別できる。

杯形土器

第1類 (1, 2, 17)

口唇部が多少外反し口唇部が若干丸みを帯び胴部から底部にかけて内彎している。(1)

口縁部がわずかに外反し、底部は平らで大きい。(2)

口縁部は明らかではないが、底部中央がわずかに上がっていき、ろくろの使用が明らかに認められる。(17)

いずれも胎土、焼成とも良好である。

第2類 (18)

碗状で焼成は粗雑。器肉は厚く、赤褐色を呈している。丸底である。

甕形土器

多数の小破片が検出されたが、復原実測可能なものは、わずかである。

その内容は、口縁部のみのもの4点(5～8)底部のみのもの2点(3, 19)である。

口縁部の形態から以下3類に細別が可能である。

第1類 (5, 7)

口縁部はゆるやかに外反する。胎土、焼成とも良好である。

第2類 (6)

口縁部は短く外反する。第1類よりも胴部張り出しは強いようである。胎土、焼成とも良好である。

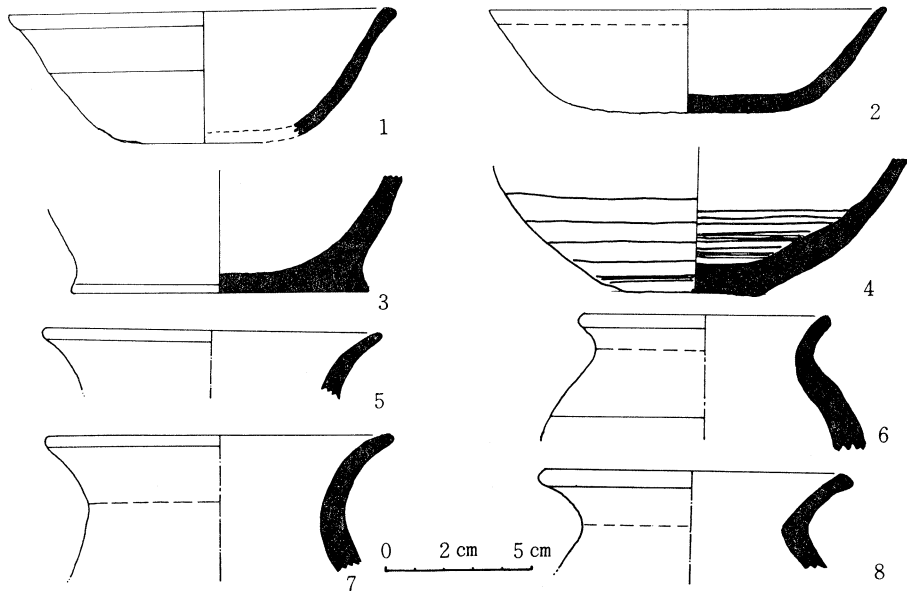
第3類 (8)

第1類、第2類よりも口縁部は強く外反し、顕著な「く」の字状を呈する。口唇部はやや肉厚になる。

その他、底部のみのものとして、平底で外に張り出し、台状になるもの(3)と、そうでないもの(19)に分けられる。底部は、共に木葉痕を有する。色調は共に黄褐色で器肉は厚い。

(2) 手捏土器 (第25図9～16)

手捏土器は概して、祭祀用の特徴ある遺物であり、土師器の一種で、壺形や埴形、高杯形、碗形などの器種があるが、粗製のうえ小型であり、実用性に乏しいので、模造品と考えられる。本遺跡からは、これに相当する粗製小型土器が、10数点検出された。以下、2類に細別が可能である。



土師器 No.1…Aブロック、No.3,6,8…Bブロック、No.7…Dブロック
 須恵器 No.4…Gブロック

第24図 出土遺物実測図(1) 土師器、須恵器

第1類 (9, 10, 11, 13, 14)

平均5cm内外の口径をもつ。白状を呈し、器肉は非常に厚くてもろい。色調は黒色で、指頭による整形痕が見られる。

第2類 (12, 15, 16)

荒い粒子の粘土を胎土とする器肉の厚い土器。色調は黄褐色を呈する。平らな底部からゆるやかに立ち上がるもので、台をもつ傾向のあるものもある。

(3) 須恵器 (第24図4, 第26図1~7)

細かく破砕されていたが、復原の結果、杯および蓋がその主なものである。蓋および杯は更に形態から2類に細別する事ができた。

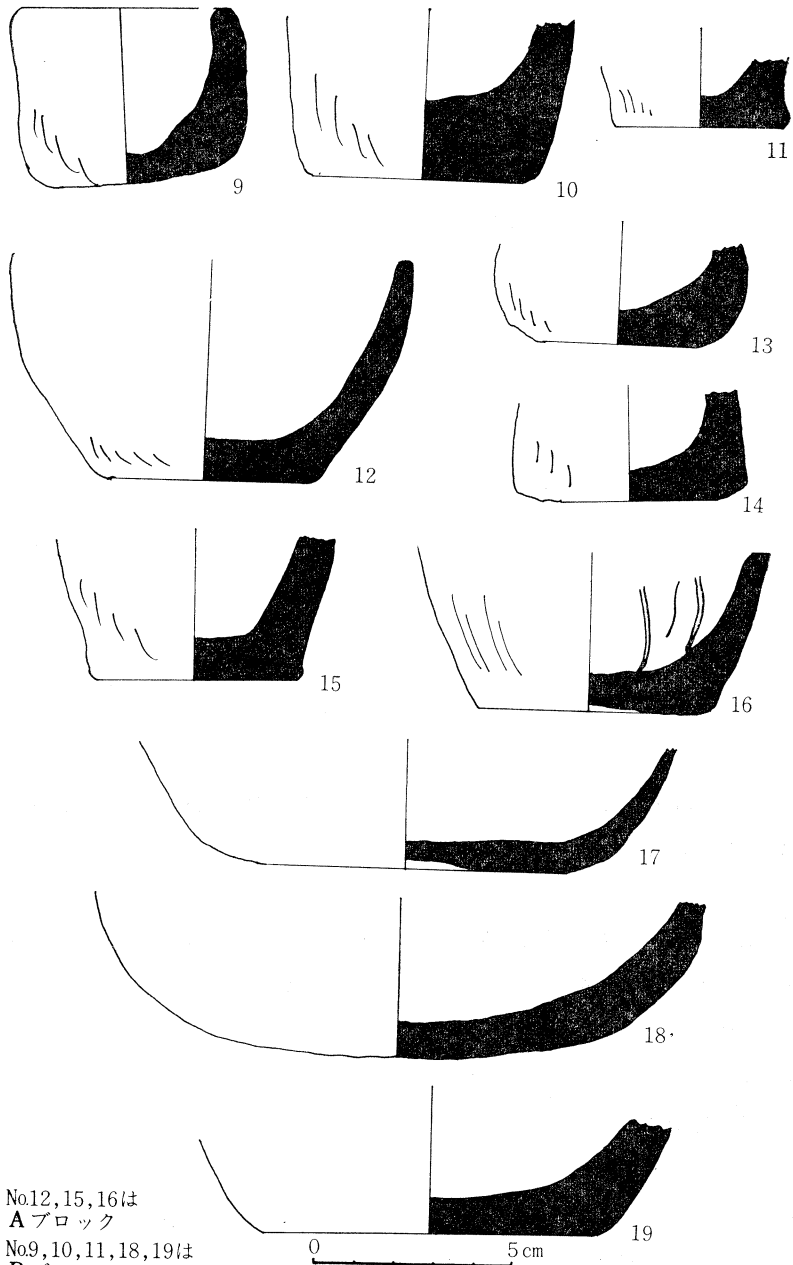
蓋 (第26図1~3)

器形が復原できたものは三点である。いずれも形態的には同一であるが、若干の相違も認められる。直径は15cm内外である。焼成は堅緻であり、色調は灰色である。口縁部はいずれも鳥嘴状を呈している。天井部のふくらみ、つまみから2類に細別が可能となる。

第1類 (1, 2)

天井部は総体的にふくらみが少なく、天井部と口縁部との境界は段をなし、端部は下方へ短く屈曲する。

中央に扁平な宝珠形つまみをもつ。つまみはまだ宝珠形のおもかげを残している。



No.12,15,16は
Aブロック
No.9,10,11,18,19は
Bブロック
No.13はDブロック
No.14はGブロック
出土

No.9~16 手捏土器
No.17~19 土師器

第25図 出土遺物実測図(2) 手捏土器, 土師器

第2類(3)

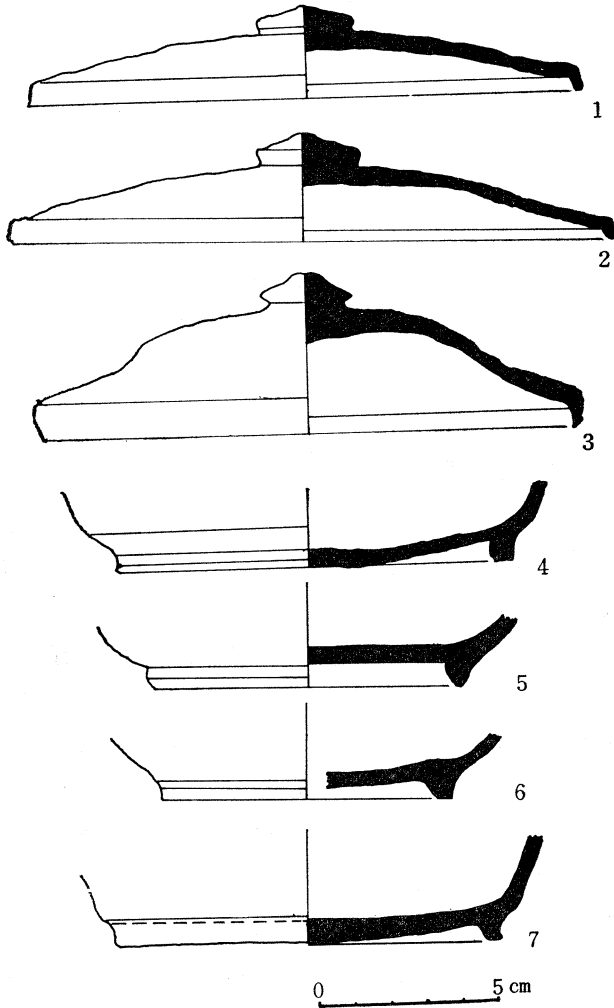
天井部のふくらみが第1類よりもあり、つまみも宝珠形である。

杯(第24図4, 第26図4~7)

第1類(第26図4, 5, 6, 7)

切り高台をもつ。側面が台部から「く」の字に曲折して立ち上がり、底部が丸味をもち、中央部で台尻と同じ高さになるもの(4, 7), 直接的に立ちあがるもの(5, 6)がある。

第2類(第24図4) 盃状杯。器肉は厚く、焼成は堅緻である。自然釉が部分的に認められる。またこの他に、緑がかかった自然釉を帯びた比較的大型の破片一片と、復原不可能ではあったが把手のついた蓋があった。



(4) 木質片(第27図)

先端が人為的にけずられており、比較的有形で杭と思われるもの(1, 3)と、人為的な形をとどめないものがある。(2)

(5) 木の實

Bブロック付近から出土。植松春雄博士の鑑定によるとオニグルミ(*Gugrans allardina*)であり、付近に自生していた植物であると思われる。

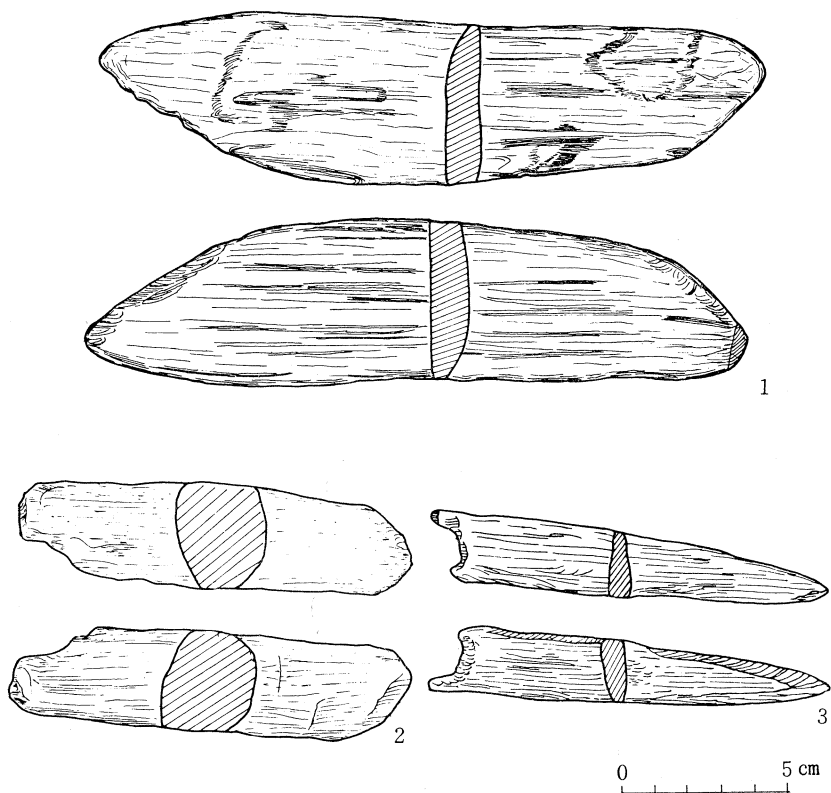
以上が本遺構から検出された遺物の大要である。

本遺構の遺物は層位的にはほとんど同一層から検出したわけであり、一括して同時期と考えて差しつかえないと思う。

土師器は主に杯形土器と甕形土器が出土しているが、杯形土器第24図1, 2, 第25図17, 18はいずれもいわゆる国分式土器のⅡ式の範疇としてとらえる事ができよう。古くは日下部遺跡から最近の甲斐国国分寺周辺聚落址の調査まで普遍的に見い出せる形態である。

No. 1, 3, 6 ... A及びBブロック 出土
No. 2, 4 Aブロック
No. 7 Bブロック

第26図 出土遺物実測図(3) 須恵器



第27図 出土遺物実測図(4)木質片

日下部式の設定について従来から種々異論があるがここでは国分二式に包含していきたい。甕形土器においてもいずれも新しい形態のものである。

須恵器はそのほとんどが細かく破碎されていたが復原のでき得た主なものは第26図に示したとおりである。杯および蓋がほとんどである。

杯蓋は扁平な宝珠形つまみをもち端部が短く屈曲する形をとるが、これらは猿投山須恵器の編年によれば第Ⅱ期後半から第Ⅲ期前半に比定されるものであろう。およそ9世紀後半から11世紀初頭頃に位置するものと思われる。第2類(第26図3)は第1類よりも若干古い形態をとどめているものと理解して良いと思う。須恵器杯にしても脚部の形態等からほぼ同一の時期として間違いなかりう。前記の甲斐国国分寺周辺の聚落址の調査報告の第1号住居址～第5号住居址出土の遺物は本遺物と形態的に酷似しており時期的にそれほど差がないものとして注目できよう。

結論的に本遺構は10世紀代を中心として営まれたものとして大差あるまいかと思う。

第 7 章 考 察

以上、遺跡、遺構の大要を述べてみたが、ここに若干の卑見を附して考察してみたい。

I 住 居 址

本住居址は、前述したように、その出土遺物のほとんどがいわゆる国分期の土師器で示められ、時代的にはほぼこの時期とする想定はよからうと思う。しかし住居の構築状況は悪く、その後の攪乱等により保存状態はすこぶる悪い。

本住居址は柱穴、周溝は検出できない。このことは何を意味するであろうか。日下部遺跡における報告、山梨県日下部中学校々庭聚落遺跡概報（上代文化第19号）によれば、日下部遺跡の住居址16軒について柱穴は皆無に等しく、周溝はないのである。このことは後に上野氏によって報告された「日下部上代聚落遺跡について（甲斐史学）」によれば、柱穴のないという事実の上立って、それを家屋構造上の問題としてとらえたのであった。その言をかりれば、すなわち「東大の藤島教授は、第二号址の東西に横たわった角材を、棟木の焼け落ちたものならんと推定され、第一次の八号址に棟持柱穴の存するところから家屋構造を切妻様式と観られたのであった。」とし、いわゆる切妻様式のためと推定しているのである。本住居址において、この結論をそのまま引用することは危険であるが、一つの参考としたい。

次に古墳時代以降の聚落の可能性は大であるが、最近になり山本寿々雄氏等により、両木遺跡等この期の資料が類積しつつあり、近い将来この地域の解明の一助になれば幸いとするところである。この点今後の資料の増加により解明が可能になると思う。今後の成果に期待するところである。

最後に、扇状地末端に構築する聚落の研究は現段階において、まだ確立されておらず、本住居址が、聚落解明の一資料に加えられるならば望外の喜びとするところである。（萩原三雄）

Ⅱ 湧水をめぐる特殊遺構

以上遺構、遺物の章で概説してきたとおり本遺構の特色について整理すると、

- 1 扇状地の氾濫原上の若干落ちくぼんだ所に形成されている遺構であること。
- 2 湧水をめぐっての遺構であること。
- 3 土器類がこなごなに粉砕されているような状況であること。
- 4 集水のための施設があること。
- 5 手捏土器が伴うこと。等

改めて指摘することができよう。

これらの遺構の特色から、この遺構の性格について仮説をたて、さらに結論に導かなくてはならないのであるがいささか推論におち入りやすいかと思う。

既にくり返してきた点であるが、いわゆる祭祀的色彩の濃い遺構にその類似性を求めていく方法が最も理解しやすいかと思う。

そこで、再度、祭祀遺跡の実態を把握しながら、本遺構に対しての認識を深めていきたい。

祭祀遺跡の研究は、古くから大場磐雄博士等を中心として多くの論文、報告がなされ、既に大系だった「神道考古学」の学域の提唱もおこなわれてきているところである。

しかしながら残念なことに、本県においては、過去祭祀遺跡に関する調査研究は少なく、わずかに上野晴朗氏等によって報告された甲府市伊勢町遺跡など数カ所知られているにすぎない。

そこで一般的な祭祀遺跡について、まず目を向けてみよう。

祭祀遺跡の概念は狭義の意味と広義の意味をもち、狭義には、「嘗ってその場所で神霊をまつり、またはそれに関連する信仰行為が行なわれたことの確認できる遺跡」をさし、広義には、「古代の祭祀、ないしそれに類する信仰行為を伴ったと推定される場所」と解される。

さて、小形手捏土器は祭祀遺物の一つであり、狭義の意味の祭祀遺跡の他に、住居址等からの出土例も知られている。その点、小形手捏土器のみの検出をもって祭祀遺跡と断定する事ができないことは論を待たないところであるし、その性格を判断することも困難である。しかし本遺跡はその状況から類推するに、確証でき得るところは、住居址等と異なるなんらかの特殊な遺構、性格を有すると考えざるを得ないということである。

さらに進めて、祭祀遺跡の性格について何を対象に「まつり」が行なわれたのかに焦点をおき分類してみたい。これについて大場博士は、かくの如く分類しておられる。

A 遺跡を主とし、祭祀の対象の明らかなもの。

- 1 自然物を崇拝の対象とする遺跡
- 2 古社の境内および関係地
- 3 墳墓
- 4 住居内

B 単独に遺物のみが発見されるもの

- 1 祭祀遺物の単独出土地
- 2 子持勾玉発見地
- 3 土馬発見地

(考古学講座による)

翻って本遺構の性格について考えてみたい。本遺跡の在る地点はしばしばくり返してきたところであるが、扇状地の末端に立地しており、ところどころに湧水を見る。調査の過程においてもジワジワと湧き出る水にしばしば悩まされたのであるが、実際に遺構中、青味を帯びた砂が数カ所検出され、当時の湧水が想定されるものである。

細く破砕された土器群は第17図、第19図～第21図にみられるようにこの周囲より雑然とした状態で検出され、杭等の木質片も確認できた。

これからして、私は、この湧水に何らかの意味を見いださざるを得ないのである。

水を対象とした祭祀遺跡の例は全国に数多い。代表的な例を見てみよう。

・熊谷市西別府湯殿神社裏遺跡

遺跡は神社裏の湧水堀にあり、遺物は、神木大けやきの下に群在している。

遺物は土器類と滑石製品の二種類である。ここの別府沼の水は広い範囲の水田の水源地として、その水霊を祭ったと考えられる。

・長野県長野市駒沢新町祭祀遺跡

(長野市発見の古代農耕祭祀遺跡を中心として——信濃18—8 大場磐雄)

ここでは1号から5号跡までの土師器を中心とする大小の遺物群(フンド)が形成され、また湧水地区や焚火跡が発見されている。

フンドを構成する遺物は各種の祭祀用品が占めているのである。ここにおいても水田に重要な灌漑用水にあてられる湧水を、祭祀の対象として祭ったものと思われる。

以上のような例は他の地方にも見られるが、本遺構もすこぶる類似的な要素をもつのである。

本遺構は、氾濫原あるいは旧河川敷と推定される大小礫が、若干のこう配をもちながら落ちていくところに立地するのであるが、前述の湧水地区と推定される地点に向けて石列が見られる。この石列は、付近一帯の水田の水抜きに使用する暗渠に非常に似かよっている。

これと同じ性格とするならば、用途は集水のためと推定できよう。果たして實際上、集水の効果があるかどうか若干の疑問もないわけではないが、機能的には湧水に関係するなんらかの作用を果たしたのではないかと想定するところである。石列のセクションは第18図のごときである。この石列のすぐ脇に接して小形手捏土器が重なって検出できたことにより同時期の所産と断定できよう。

このような資料をもとに現段階において分析してゆくならば即ち祭祀的要素を有する特殊な遺構と認識できる。又、それ以外にはこの種の資料の類積を待つほかないであろう。

さて本遺跡の時期はいつ頃と推定されるだろうか。小形手捏土器に伴出して出土した土師器、須恵器によれば前述のように10世紀頃と想定して良かろうと思うが、この点について祭祀遺物

から祭祀そのものの年代を 亀井正道氏は、「建鉢山」の報告によせて分類しておられる。この分類によると第1期から第6期に分け、滑石製模造品が減少し土製模造品が出現し手捏土器が一般化する時期を第4期（ほぼ6世紀前半から中葉）と推定している。

また第6期最終期になると手捏土器が主体を占めこれに土師器や須恵器が伴ない滑石製模造品は消滅してなくなる。

またこの時期の手捏土器は大部分平底になり底径は口径に近い程度に大きく安定した形態となる。（ほぼ7世紀前半以降。）

以上から本遺構の年代は祭祀遺跡の推移からしてもかなり下がり、伴出土器から推定し10世紀代を中心とする時期に設定できよう。

参 考 分 献

- 神道考古学講座 雄山閣
日本の考古学 河出書房
考古学講座 雄山閣
神道考古学論巧 大場磐雄
山梨県日下部中学校々庭聚落遺跡概報 小出義治・上野晴朗 上代文化第19号
日下部上代聚落遺跡について 上野晴朗 甲斐史学
建鉢山 亀田正道 吉川弘文館
長野市発見の古代農耕祭祀遺跡を中心として 大場磐雄 信濃
山梨県甲府市伊勢町遺跡調査概報 上野晴朗 甲斐史学

あ と が き

以上で下成田遺跡の調査報告を終るが、最後にあたり、発掘調査及び整理、報告にご協力いただいた調査員並びに学生諸君に感謝の意を表したい。次に調査に参加した方々の氏名を記しておきたい。

発掘担当者	野 沢 昌 康	
同 調査員	折 井 忠 義	
	早 川 方 明	
	渡 辺 礼 一	
	森 和 敏	
	萩 原 三 雄	
	上 原 稔	
同協力員（山梨大学）	一寸木 和 広	中 島 芳 美
	浅 川 まゆみ	西 川 泰 正
	玉 井 省 一	土 屋 泰 広
	今 沢 俊比古	安 部 真 一
	曾 根 哲 哉	笠 井 美 幸
	志 村 美千子	渡 辺 孝 子
	宮 下 敬 子	深 沢 雄 二
	樋 口 睦 男	望 月 吉 国
	平 井 宏 一	鈴 木 美 里
同協力員（法政大学）	曾 根 博 明	
同協力員（早稲田大学）	山 田 武 美	沼 本 芳 喜
	斉 藤 裕 嗣	野 元 晴 範
県立南高校郷土研究部	立 川 実 造	ほか
県立山梨高校郷土研究部	手 塚 寿 男	ほか
協同力員	中 村 良 一	
	桜 林 芳 秋	

图 版



図版第1図

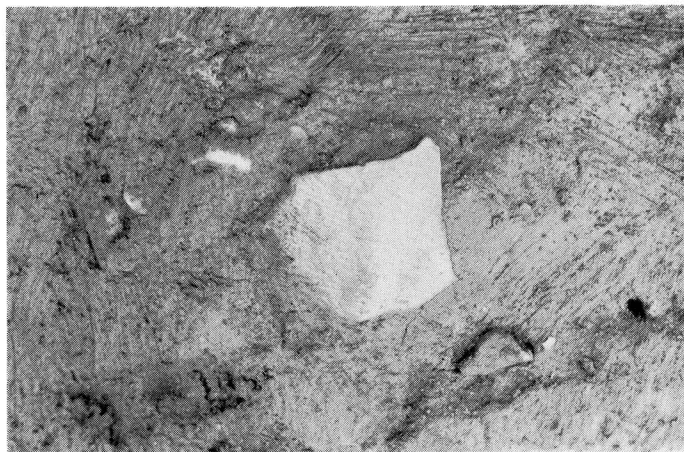


1 住居址全景

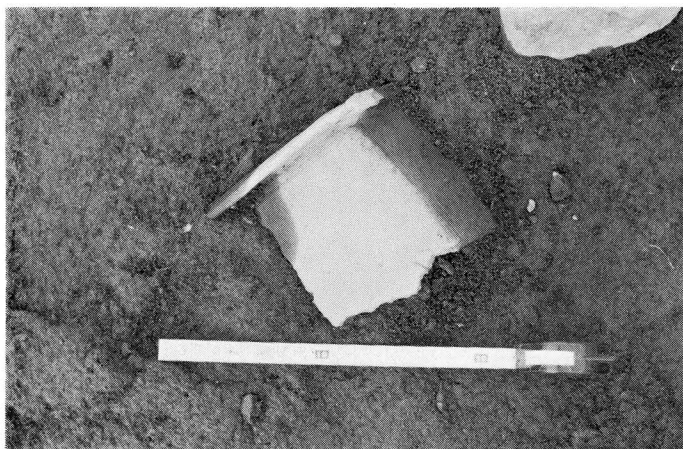


2 住居址カマド付近

図版第2図



1 住居址土器出土状況（土師器）

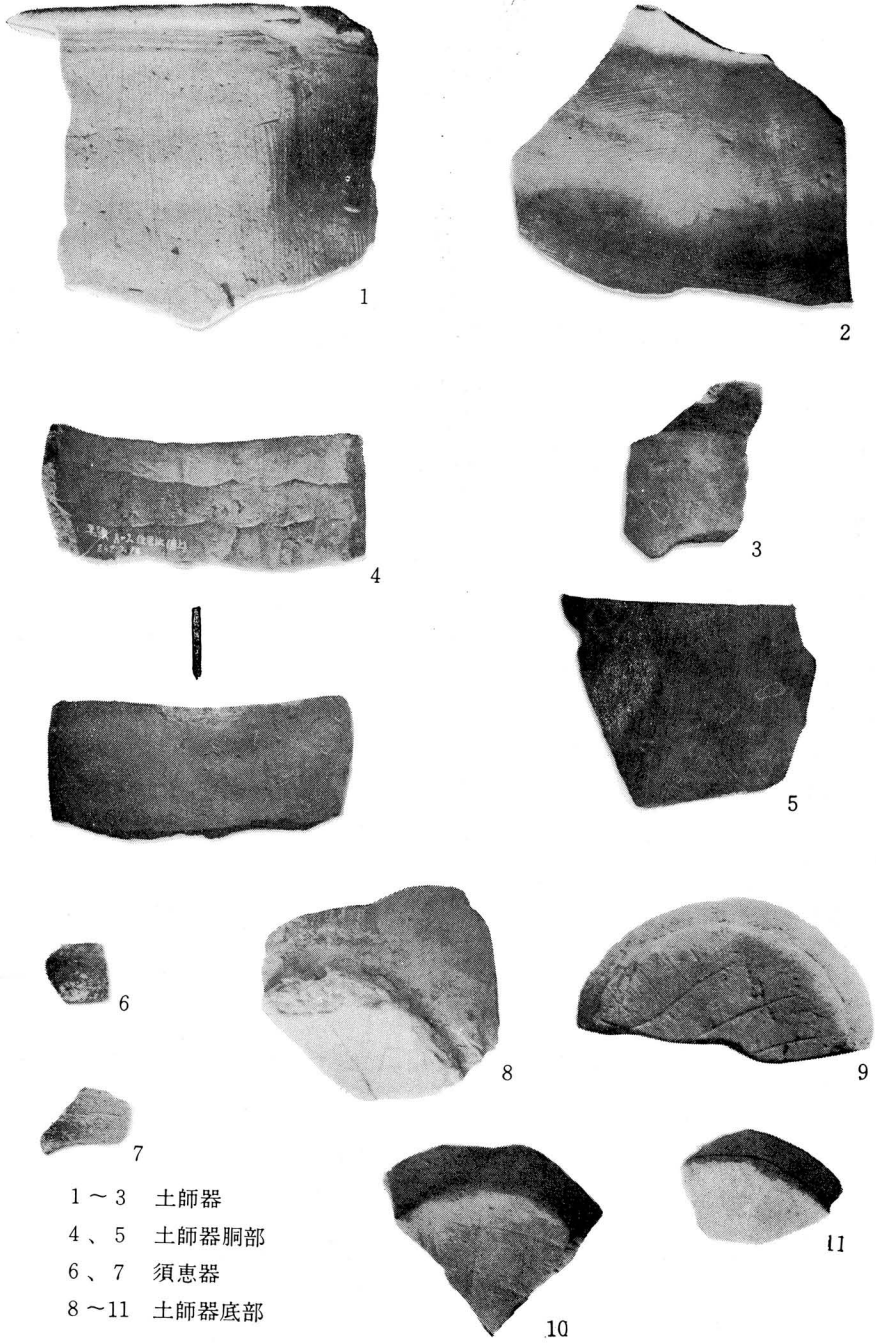


2 住居址土器出土状況（土師器）



3 住居址カマド付近

図版第3図 住居址出土土器



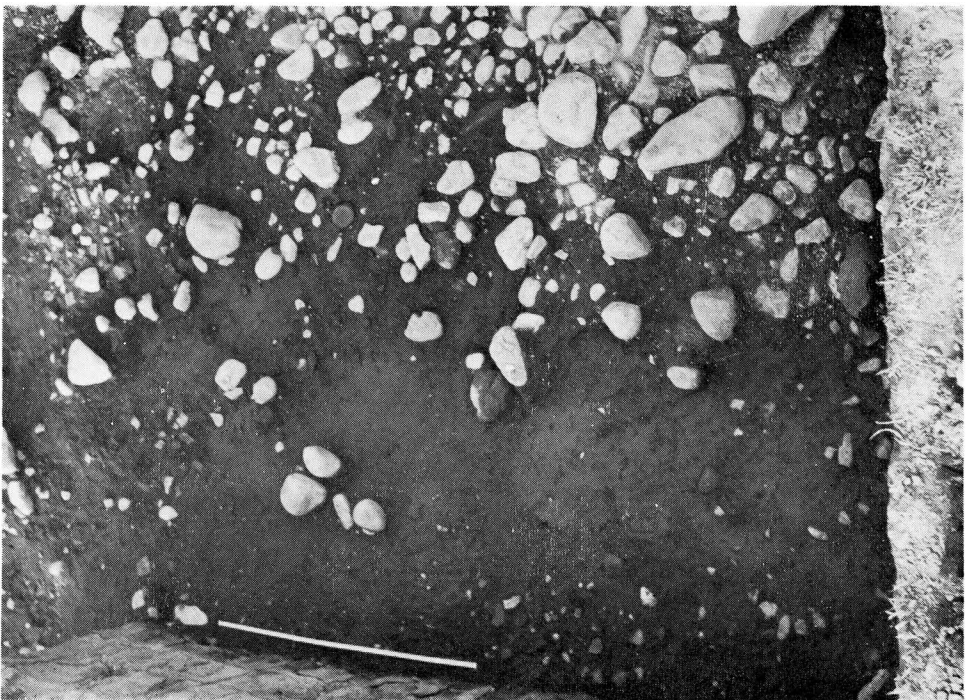
図版第4図 湧水をめぐる特殊遺構全景



図版第 5 図

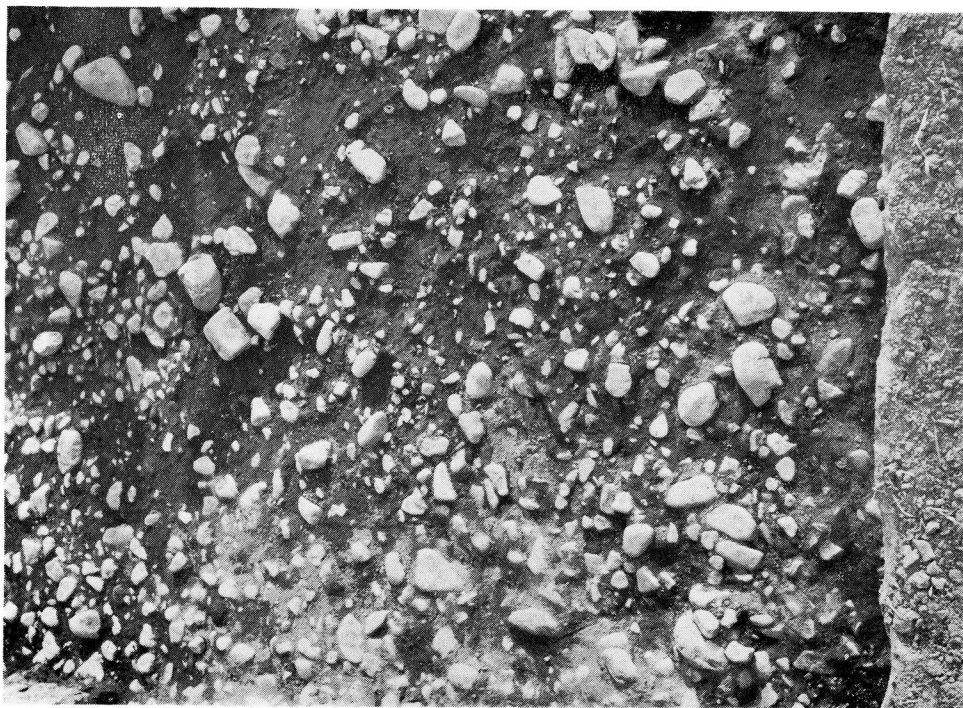


1 湧水をめぐる特殊遺構（北西隅）



2 同 上（南西隅）

図版第6図



1 湧水をめぐる特殊遺構（東北隅）



2 同 上（東南隅）

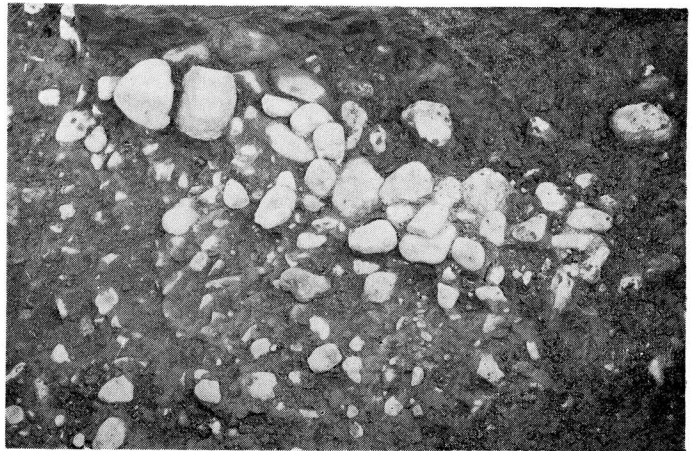
図版第7図



1 湧水をめぐる特殊遺構（南から）



2 同上 石列



3 同上 石列

図版第 8 図



1 湧水をめぐると特殊遺構（石列）

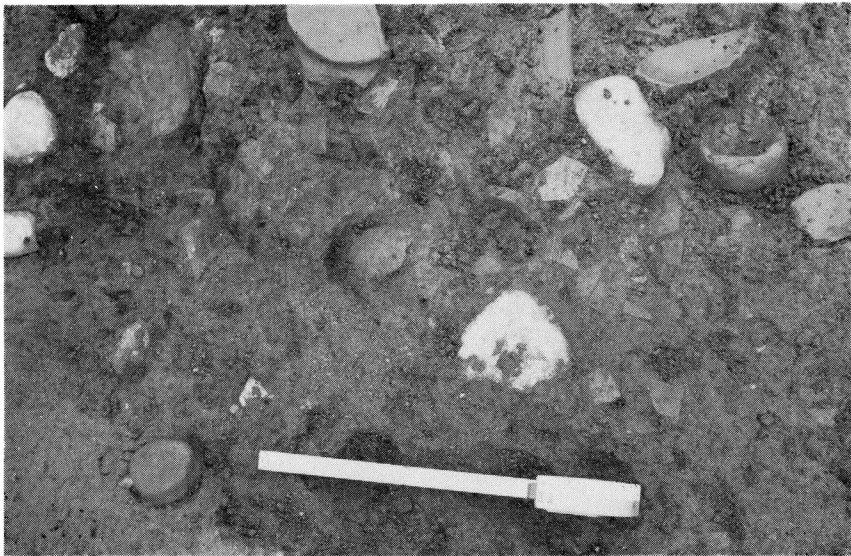


2 同上 木質片出土状況

図版第 9 図

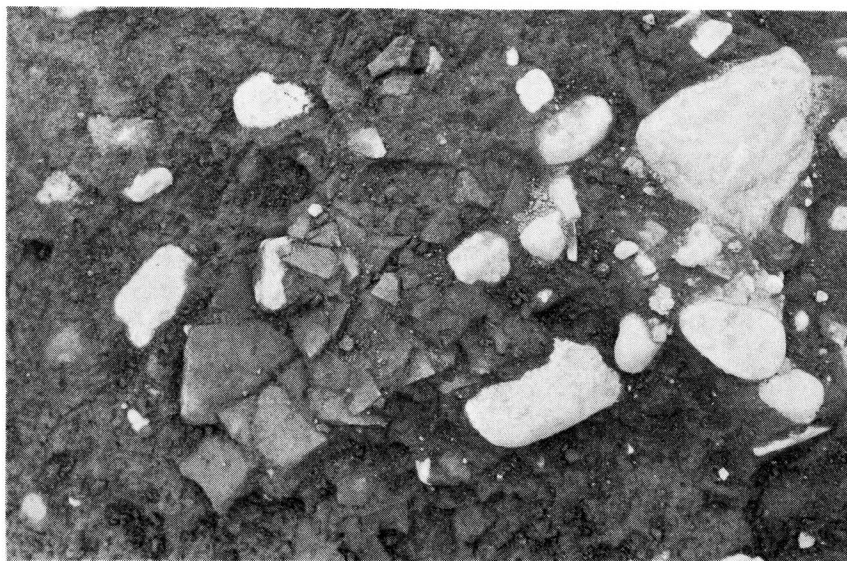


1 湧水をめぐる特殊遺構 Aブロック土器出土状況



2 同上 Bブロック 土器出土状況

図版第10図



1 湧水をめぐる特殊遺構 Dブロック土器出土状況

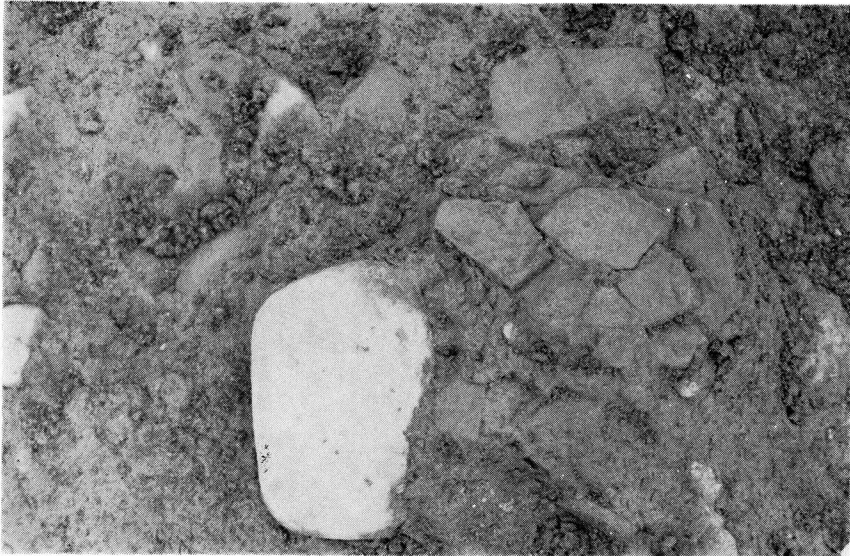


2 同 上

図版第11図



1 湧水をめぐる特殊遺構 手捏土器出土状況

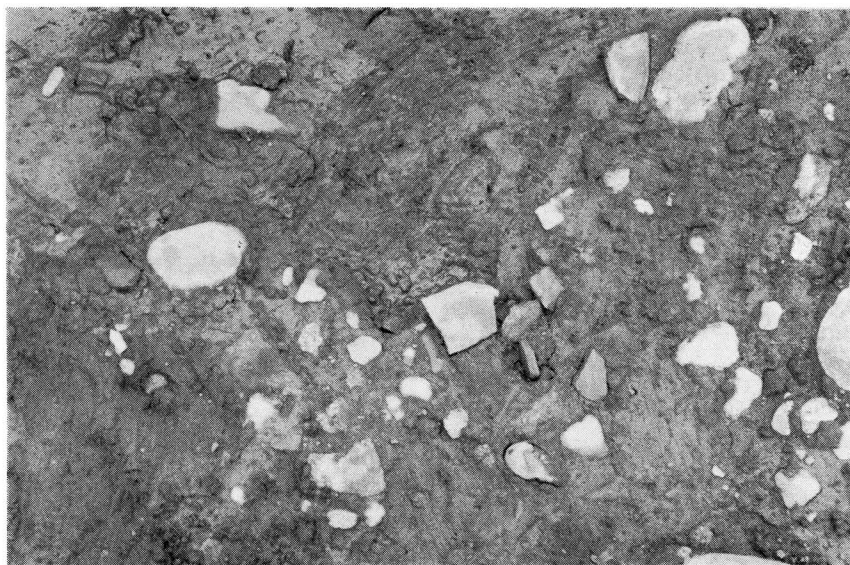


2 同上 Dブロック土器出土状況

図版第12図

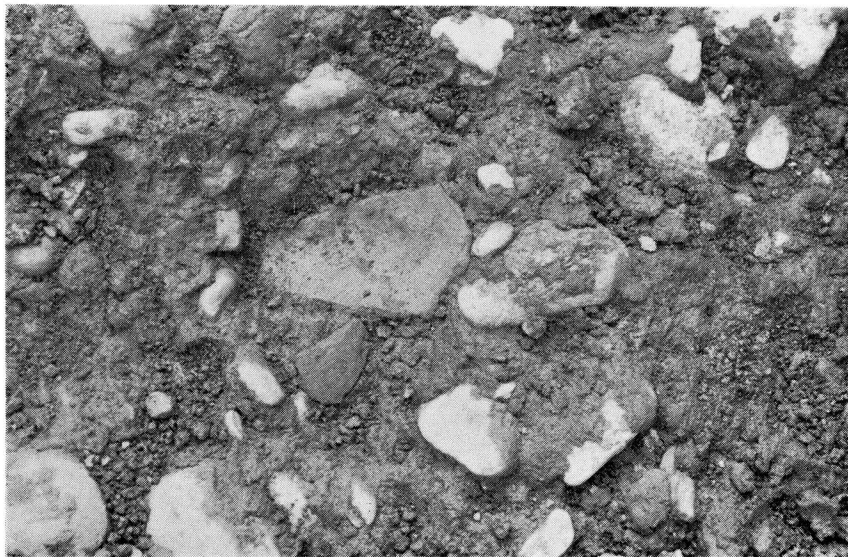


1 湧水をめぐる特殊遺構 土器出土状況

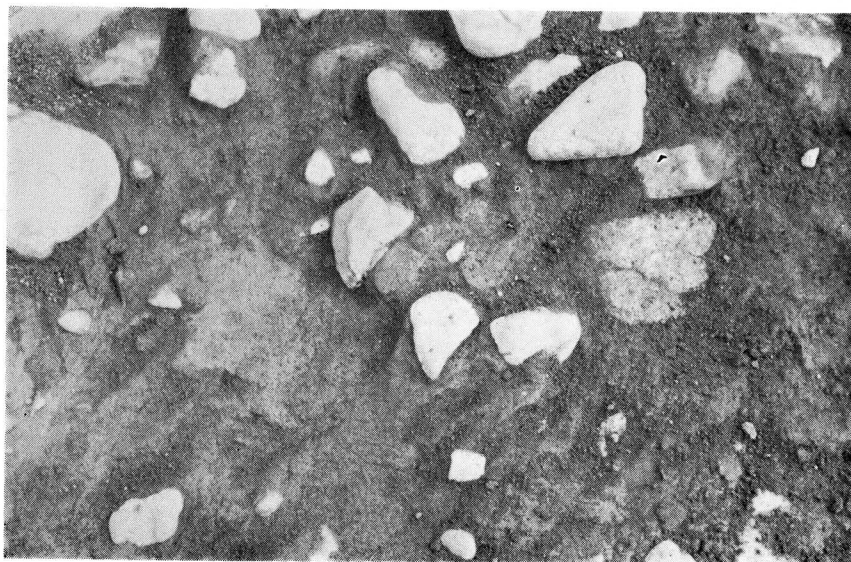


2 同 上

図版第13図



1 湧水をめぐると特殊遺構 土器出土状況



2 同 上

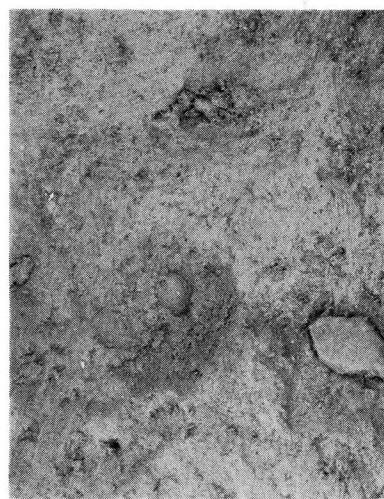
図版第14図



1 湧水をめぐる特殊遺構 木質片出土状況

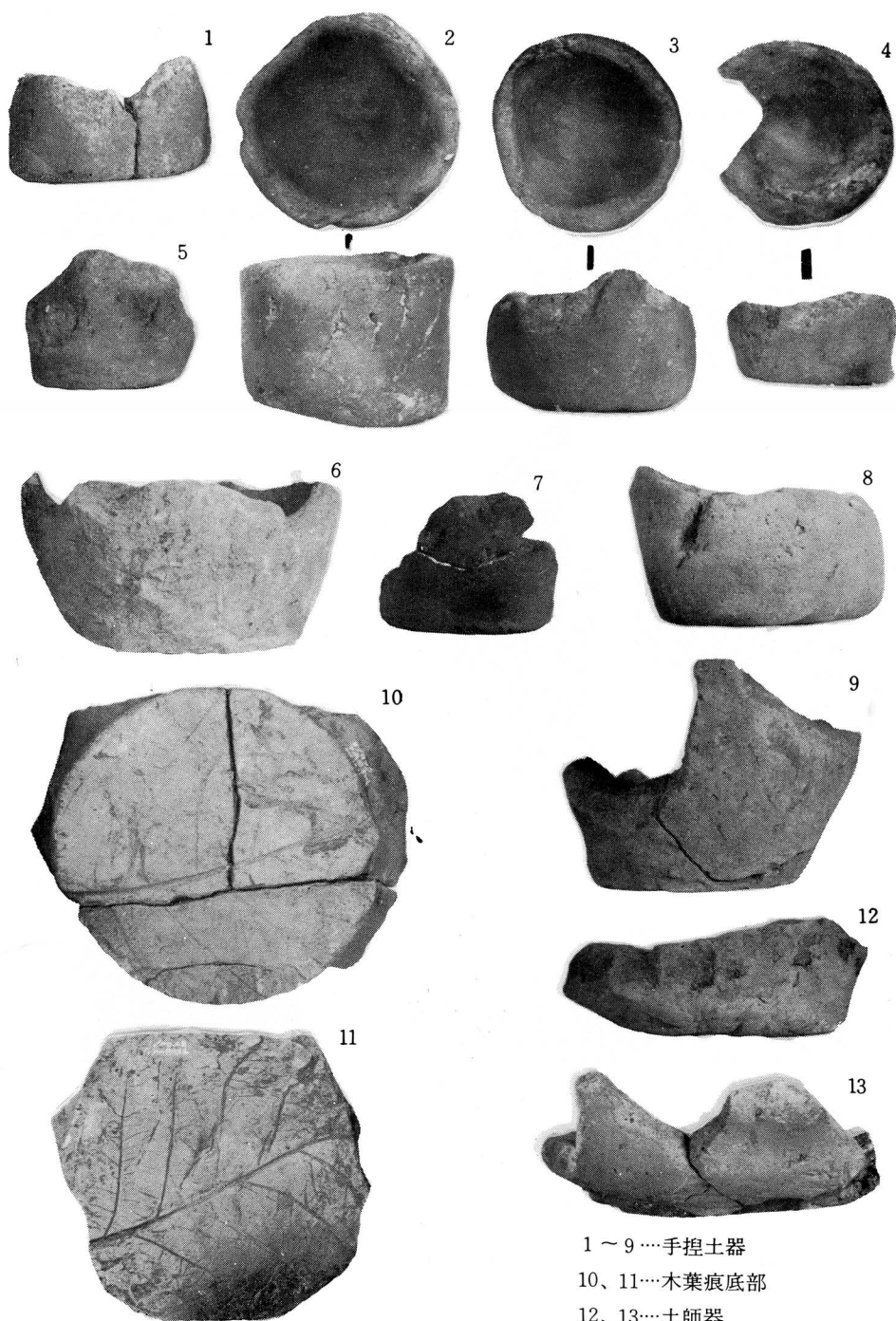


2 同 上



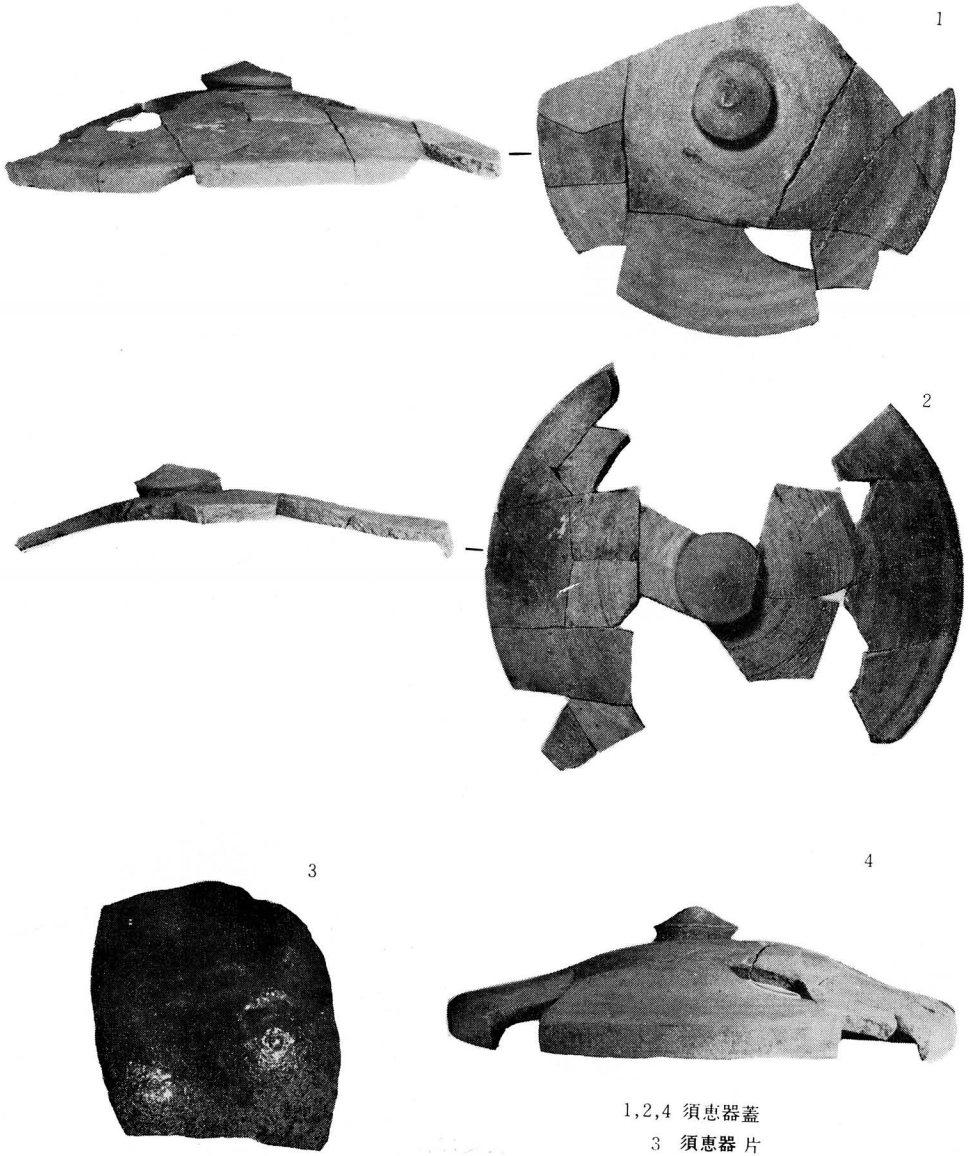
3 同上 くるみ出土状況

図版第15図 湧水をめぐる特殊遺構 出土土器

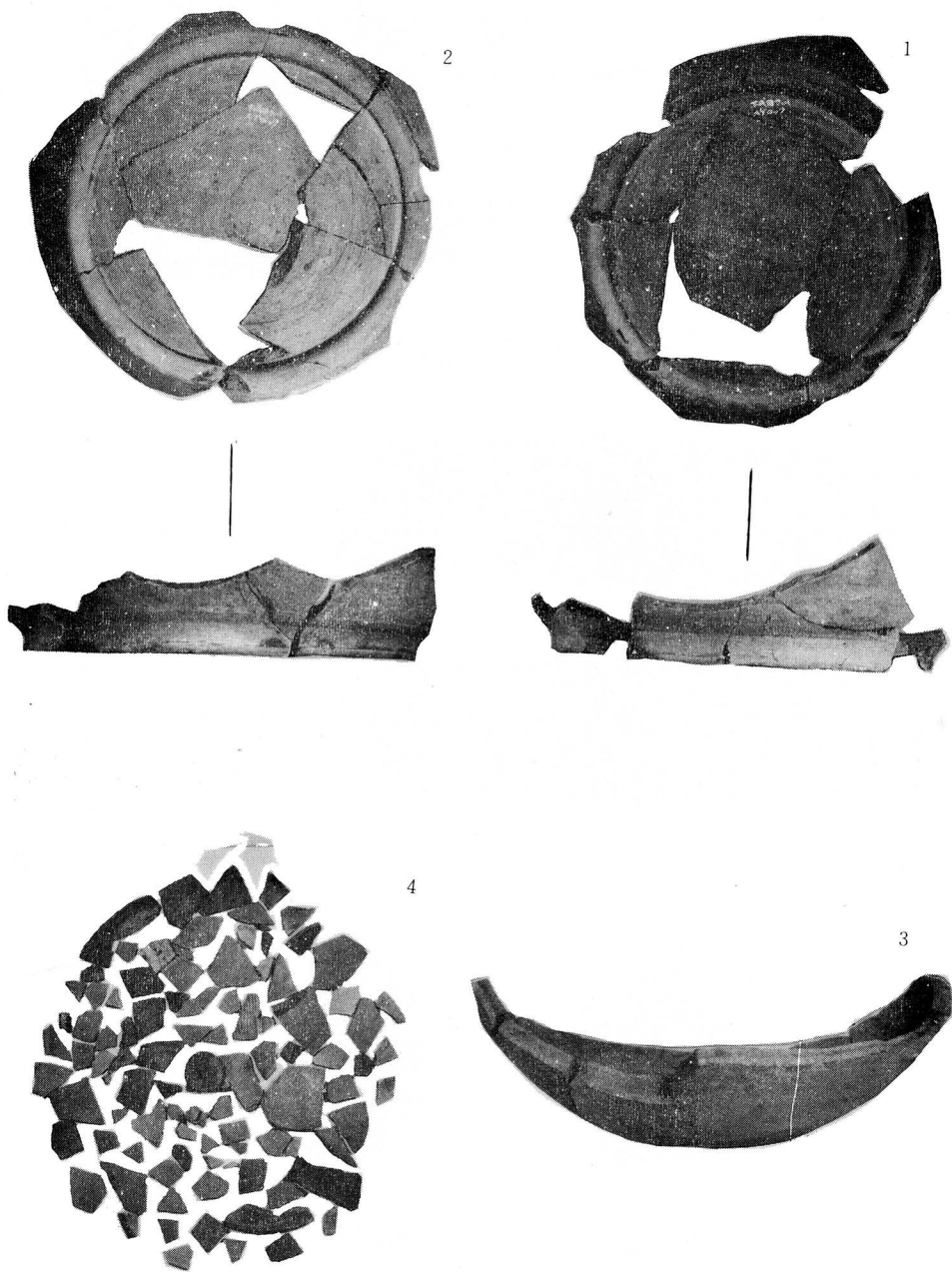


1～9…手捏土器
10、11…木葉痕底部
12、13…土師器

図版第16図 湧水をめぐる特殊遺構 出土土器



図版第17図 湧水をめぐり特殊遺構 出土土器



1～3 須恵器杯

4 破砕された須恵器

図版第18図 湧水をめぐる特殊遺構 出土遺物



1、2 木質片 3 オニグルミ
(*Juglans allardiana*
(*Dode* var *acuta* Kooildz))

下 成 田

山梨県御坂町下成田遺跡の調査報告書

印 刷 昭和 49 年 3 月 日

発 行 昭和 49 年 3 月 日

発 行 山 梨 県 教 育 委 員 会

編 集 山 梨 県 遺 跡 調 査 団
甲府市丸の内一丁目 6 番 1 号

印 刷 温 故 堂 印 刷 株 式 有 限 公 司
甲府市相生一丁目 7 番 16 号

